

通類編

男達五馬金

第六年
九月号



雷庄九
市川游十郎

新刊



秋あきに對むかふ

九月の三越

流るゝ雲にも秋らしい涼しさ
 が見え始めました。俄に時め
 く流行界に斬新な趣味色調を
 誇る三越のお召もの、さては
 シヨール、ハンドバッグ、
 帽子、ネクタイ、洋服等何れ
 も今秋のアラバージュとし
 てそれ々々清新な姿を現し御
 選擇をお待ちして居ります。

越

三



大 阪

風味必ず御氣に召す

天ふら御料理

季節日本御料理

其之居情緒と食道楽 喜久屋食堂

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を！

道頓堀戎ざし北詰

支店

大阪支店 北新地裏町
京都支店 木屋町ドングリ橋





道頓堀

昭和六年九月號

第六十輯

繪 口

新秋の道頓堀を彩る繪行燈
 中座 長八郎 戸並長八郎 延若 宿無僧 喜月 實は中の
 喜七 魁車 布長三郎 春雨 若い男 多村 九郎 繪山 大八郎 菊枝 青名 宿無僧 起上り 小法
 師 小法師 實長三郎 春雨 若い男 多村 九郎 繪山 大八郎 菊枝 青名 宿無僧 起上り 小法
 花菊江 布袋 市右衛門 魁車 小縫 文童 妻お花 春野 谷川 一松 竹家 庭劇 延若 小法
 の空箱 小説 家倉橋 寒村 魁車 小縫 文童 妻お花 春野 谷川 一松 竹家 庭劇 延若 小法
 まね 息子 天外 岡目 八目 父幸太郎 十次郎 母お定 天照 春野 谷川 一松 竹家 庭劇 延若 小法
 宇田清造 森田福平 十吾 岩坂松太郎 賀川 店員 徳松 三樂 おます 守住 倉橋 寒村 小の 猿
 娘お雪 造 十吾 鹿沼の源新 劇頭 三郎 賀川 店員 徳松 三樂 おます 守住 倉橋 寒村 小の 猿
 月田中平造 森田福平 十吾 岩坂松太郎 賀川 店員 徳松 三樂 おます 守住 倉橋 寒村 小の 猿
 藝妓小和歌 浦十吾 鹿沼の源新 劇頭 三郎 賀川 店員 徳松 三樂 おます 守住 倉橋 寒村 小の 猿
 小波内藏之助 藤本小松 佐兵衛 伊川 藤兵衛 原田 明智 光秀 富士野 松崎の六平 太 中 田
 別宮山口 照美 小松 佐兵衛 伊川 藤兵衛 原田 明智 光秀 富士野 松崎の六平 太 中 田
 入島臺 小坂部 三十三 所帯 衛 伊川 藤兵衛 原田 明智 光秀 富士野 松崎の六平 太 中 田
 駒形屋茂兵衛 三十三 所帯 衛 伊川 藤兵衛 原田 明智 光秀 富士野 松崎の六平 太 中 田
 三郎 辨慶 舞御前 虹 知盛 菊八 多三郎 福助 京南 波一里 義十彦 松
 竹大レヴェエ 舞御前 虹 知盛 菊八 多三郎 福助 京南 波一里 義十彦 松

◆女形と女優の將來

◆日本女優の二明星

水谷八重子と尾上菊枝

◆尾上菊枝と舞踊

永田龍雄 (六)

◆權太の丸み

入江來布 (三〇)

◆浪花五人男考

高谷伸 (三六)

◆浪花暴力團記

倉田啓明 (三八)

◆浪花五人男

西尾福三郎 (四〇)

考 證

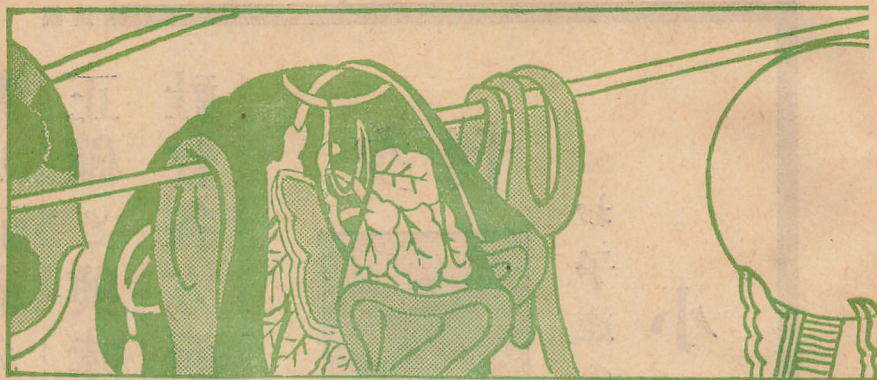
◆青

天井井 (芝居小説) (九月中座上演) (二〇)

◆一本刀土俵入 (芝居見たま) (九月前座上演) (二〇)

◆反逆する光秀 (芝居見たま) (九月角座上演) (二四)

◆旅鴉一本刀 (芝居解説) (九月角座上演) (二六)



『旅鴉一本刀』の
不職渡世の仁儀作法
行友 李風 (二〇)

作者の
『一本刀土俵入』の
『戸並長八郎』に就て
長谷川 伸 (二三)

部
『南蠻繪の光秀』
『反逆する光秀』に就て
鳥江 鎮也 (二五)

屋
夏 日 嘆 語
德 田 純 宏 (三二)

蝶六の映畫入り
南 部 橋 一 郎 (三四)

樂しかつた樂劇部時代
浦 波 須 磨 子 (九)

見違へるやうな自分を見る歡び
林 長 三 郎 (二九)

路傍で拾つた話
山 口 俊 雄 (二三)

◆反逆する光秀舞臺裝置その他
大 森 正 男 (四六)

◆反逆する光秀演出に就いて
野 淵 昶 (四七)

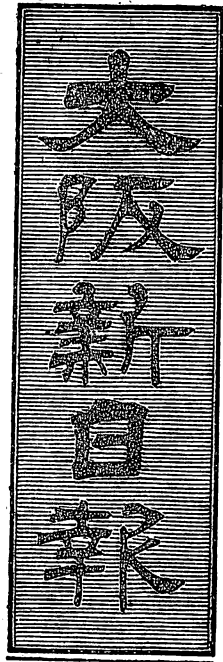
菊五郎を語る座談會
成瀬 無極 林 久男 飛鳥 明子 山本 修二
山上 貞一 南 江 二 郎 森 保 高 谷 伸
松本 泰三

東京に進出した家庭劇に寄す
高澤 初風 伊藤 晴雨 大隈 俊雄 伊原 青々園
畑 耕一 足立 忠 津 村 京 村 石 井 迷 花
岡田 孤煙 梅島 昇 鬼 津 村 太 郎 花 柳 章 太 郎
水谷 幻花 大久保 將 吉

口劇壇往來
編輯後記
田中滿彦
(五二)
(五四)

常に正義の味方と自負する痛烈骨を刺す所論
正確と興味本位とを以つて誇るニユー・ス報導
社會各方面に話題を提供する面白い趣味記事

夕刊



お子達のための附録

小學兒童版

(毎土曜日添附)

定價

一部 貳錢
一ヶ月 五拾錢
郵税一ヶ月拾五錢

發行所 大阪新日報社
大阪市此花區上福島南一丁目

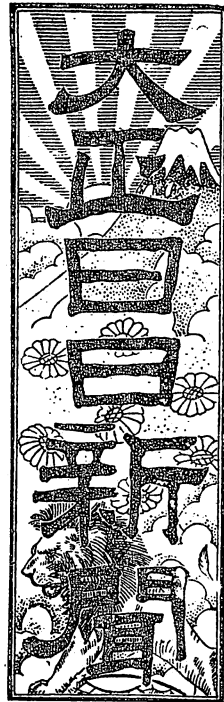
電話福島 二六〇番 二六二番
二六三番 二六四番
振替口座 二二二一〇番

「くし正く強！聞新色桃」◇

◇…すくる明を庭家と間世く好氣景」

錦城將軍 米田誠夫經營

◇…生氣潑刺日本一の生きた新聞◇



(刊 朝)

◇…演藝||藝界に起る特種速報主義

◇…花柳||男讀む可からず!藝妓讀本

◇…映畫||ファン歡迎獨特記事滿載



(刊 夕)

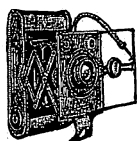
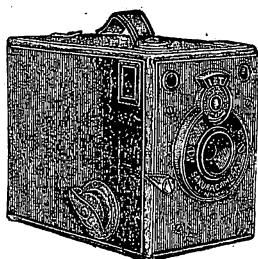
◇…名實共に日本唯一の無休刊紙◇

地番六目丁四濱北區東市阪大(社本)

七二〇六五阪大替振番〇六九・〇六三四}局本話電
番〇七二・六二八四}

御家庭の御團樂に必ずカメラを！

さくら
カメラ
フ井ルム
(御子達向のベスト判三圓五十錢)
(ベスト判四十五錢其他各判有り)



トツレーパ
圓五廿、圓七十

(カタログ進呈)

寫真機及小型活動寫真機

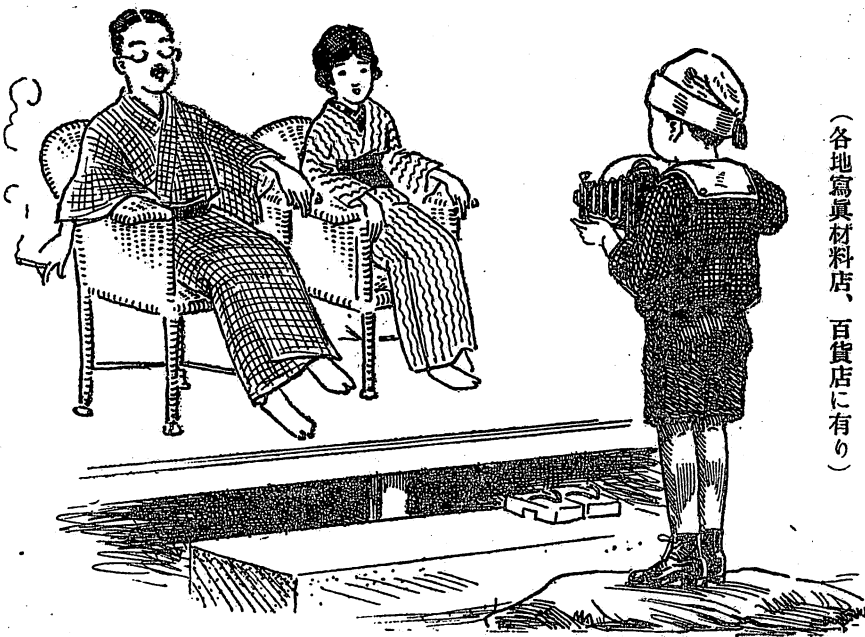
小西大阪支店

大阪市長堀橋筋

電南

二三九二
三三〇四
三九八三番

(各地寫真材料店、百貨店に有り)





る彩を堀頓道の秋新
燈行繪

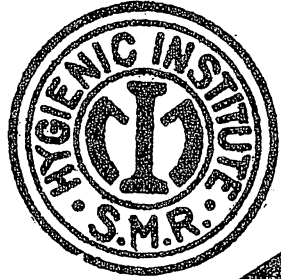
・・・でん因に言狂月九座中・・・



月九・座中

郎八長並戸

若延郎八長並戸



病ハ

未
然
ニ

特色

- ◇ウチ南京虫等奏効確實なり
 - ◇殺菌力強烈にてクレゾール石鹼液の約二倍なり
 - ◇防臭力強く撒布後は芳香を放つ
 - ◇本劑混入の尿は農作物に對し絶對に害なし
- ◎數百倍に稀釋するも効力強烈なれば同種品中最も經濟なり。

大衛衛生研究所 強力殺菌劑



ウチのチウセ殺

日増に著くなりますと各御家庭ではイヤな蠅が出て來ますが僅か一週間か十日位で幾萬倍にも殖える蠅は相當高價な驅除劑を使つても死滅さす事は容易ではありません、そこで蠅が未だ飛び立たない時に蠅の幼虫(ウチ)を撲滅すれば勞少くして効果の大なる事は誰しも御考へになる事と存じます、然し今日迄確實に(ウチ)を殺す藥劑がなくて困つて居りましたが滿鐵の衛生研究所で製造發賣せる強度の殺菌力ある衛研「チウセ」は効力の甚大なる事は同種製品の追隨を許さず完全に目的を達します。

本劑使用に際し家庭便池中尿尿の多寡によるも普通本原液の「拾五グラム」をビール瓶一杯の水に溶かす(約五十倍)其乳化液を一回に一本乃至二本の使用を適當とす。
殺菌力：五十倍溶液：百倍溶液にても一分間以内に死滅す。殺菌力：(大腸菌)其他塵芥箱等には二百倍溶液にて確實に死滅す。

南滿洲鐵道株式會社

製造發賣元 衛生研究所

大阪市東區伏見町三丁目二七

販賣元 光榮商會

電話本局三三一五番
振替大阪三三一七番

有名藥店各デパート

に有り

年五十治明刊創



社聞新濟經阪大 株式會社

一濱北區東市阪大

番九〇〇四 } 周本話電
番〇〇一四 }
番一八三五 }

戸並長八郎

虚無僧喜月
實は中ノ瀬喜七
宇芽本女將お瀧

魁 車
喜 多 村



戸並長八郎
九・月・中座

檜山大八郎

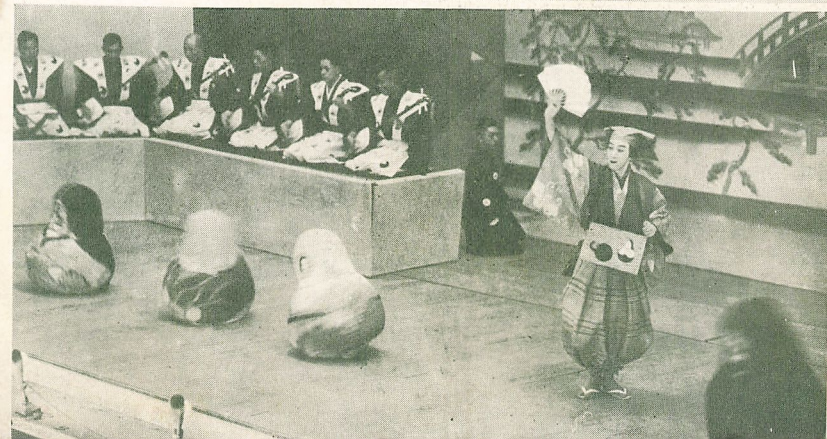
扇雀



桑名の宿

捕手頭
柳田半兵衛
戸並長八郎
盧無僧喜月
宇芽本女將お禮

鴈三郎
吉三郎
魁延
喜多村



新舞踊
" 起上り小法師 "

小法師賣

長三郎

アングロス井ス

ミルクチヨコレート

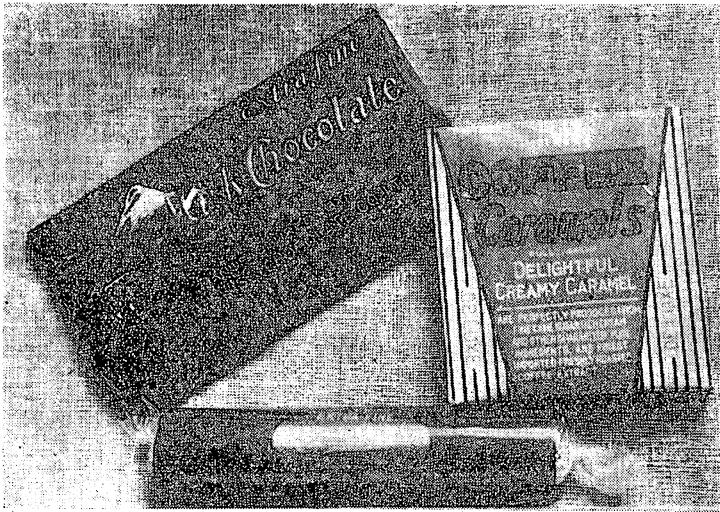
コーヒキヤラメル

チヨコレート
キヤラメル

大阪市東區豊後町三番地

發賣元 株式会社
横山商店

電話東(94) 二〇六一番



純白固煉



新發賣

御園チタニウム白粉

驚異的

新化粧美!

正價 金五十錢

■ 艶麗な濃化粧に……………

目もさめる様な白さ。明るい華やかな澄み切ったお化粧上り。

■ 清楚な淡化粧に……………

うすく溶いても白さが濃く、ノビが平らでムラがなく、さつぱりした美しさ。

■ お襟の魅力に……………

くつきり冴えた美しさ。お召物を少しも汚しませんから快くつかへます。

□ 断然優良な新原料が持つ此白さこそ

新日本女性美です!



“ 雨 春 ” 踊舞新

枝 菊 女い若 郎三長 男い若

枝 菊 禿 “ 禿の根羽 ” 踊舞新

枝 菊 花お娘 若 延 郎九庄雷 “ 井 天 青 ” 目番二



座中・月九

井天青



雷庄九郎

延

若



娘
和
花

菊

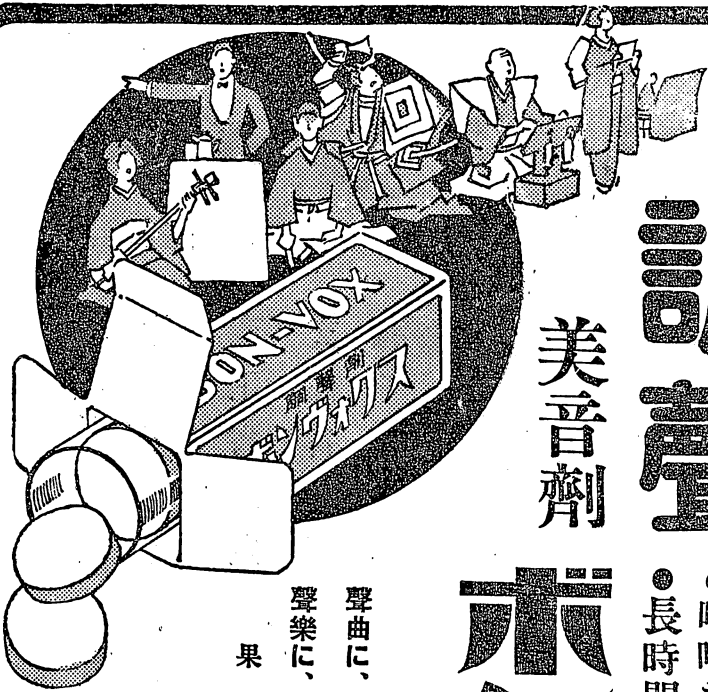
枝



布袋
市右衛門

魁

車



調聲

美音劑

ボングラス

…内服用の錠劑です…

聲曲に、講演に、
聲樂に、座談に、

果 然……

鷹治郎、歌右衛門、羽左衛門、幸四郎、松尾太夫、延壽太夫、土佐太夫、鐵太夫、伊十郎、六左衛門の諸名家より絶讃を博して居ります。
ボングラスは今や音曲、樂界で話題の中心となつて居ります。

従來の飴を基劑にしたものや薄荷様の美音劑とは全く異り、中樞神經を刺激し喉頭の血行を旺盛ならしめ、聲帯に適度の緊張を與へ自由なる振動を營ませます。

〔用法〕 大人 一回 二錠
小人 一回 一錠

發聲前 三十分乃至一時間
に水又は白湯にて服用

〔價格〕 一〇〇錠入 一圓
一〇〇〇錠入 七圓五〇

効力は服用後數時間に亘り持續す。

知名藥店にあり

新發賣

〔説明書は御申
越次第進呈〕

製造元 神戸市二番町
販賣元 大原市東區渡邊町
株式会社 神戸衛生實驗所
株式会社 武田長兵衛商店

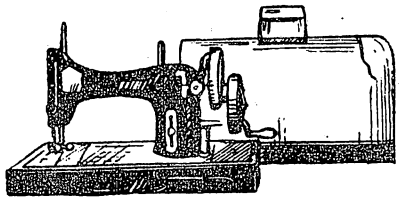
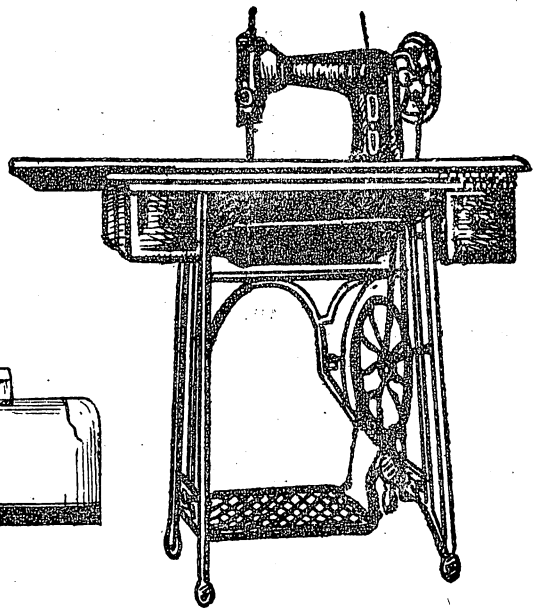
パインシン

大 阪 三 越 婦 女 界 社
 京 都 大 丸 講 談 社
 東 京 松 坂 屋 之 友 行 社



政 府 補 助
 優 良 國 産
 商 工 省 選 定
 文 部 省 推 薦

目 下
 大 阪 三 越 四 階
 ミ シ ン 賣 場 ニ テ
 宣 傳 販 賣 中
 パ イ ン シ ン 株 式 會 社



手 廻 特 價 貳 拾 四 圓
 手 廻 特 價 參 拾 五 圓

足 廻 特 價 四 拾 五 圓
 足 廻 特 價 七 拾 圓

岡目八目

職工星野
女房おしづ

如天
月外



田中平造

十吾

九月・浪花座
"家庭劇"



“劇庭家”座花浪・月九



息子 文雄
 父 幸太郎
 母 お定

“人の猿まね”

十次郎
 十次郎
 天照

“バットの空箱”

小説家 倉橋寒村
 悴定雄
 妻 定雄
 小説家 谷川一郎
 妻 ぶき

小文春賀

織童野川





“バツト
の空箱”

倉橋寒村 小織
宇田清造 天外

娘 山へ登る船
森田お雪
船頭福平
常三 天十郎
外吾

“目八目岡”

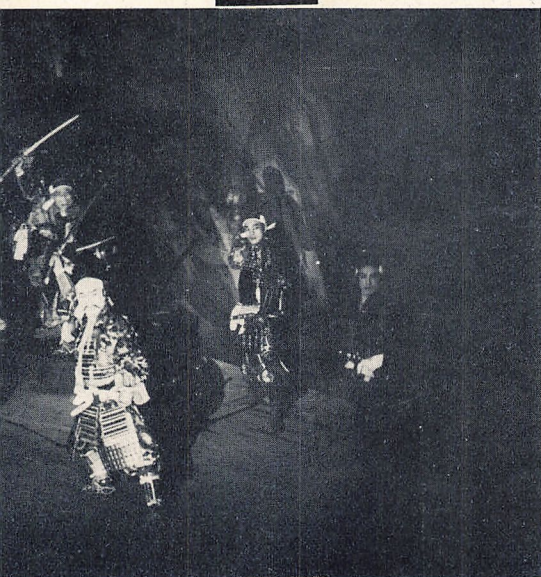
岩店お松
坂具徳
松徳松
太郎
賀三守
川樂住



座 角 ・ 月 九

得 見 目 お 劇 聲 新

“ 秀 光 る す 逆 反 ”



子 照 妻 秀 光 の 野 士 富



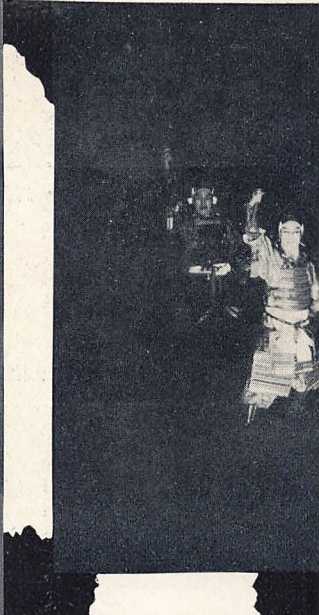
“ 反 逆 する 光 秀 ”

舞 臺 面

中 田 の 光 秀 ・ 小 波 の 光 春
藤 本 の 内 藏 之 助 ・ 中 澤 の 庄 兵 衛 ・ 原 田 の 藤 兵 衛



中田の明智光秀



“ 争 鬪 ”

原の石川・山口の別宮
小松の照美・伊川の佐兵衛



“旅鴉一本刀”



伊川の古宿の仁兵衛・伊田松崎の六平太

辻野の鹿沼の源太



和歌浦の藝者小稻

あらゆる印刷



永井日英堂印刷所

大阪市西區土佐堀通一丁目

大阪中央局私書函第壹八號

電話土佐堀(44)

三〇八三番
四九四〇番
四九四一番

振替大阪一九三九〇番

生活線ABC

秋の二大白眉篇

細田民樹氏原作 「婦女界」連載
島津保次郎監督 村上徳三郎脚色

鈴木傳明、高田 稔、田中絹代
藤野秀夫、山内 光、及川道子
澤 蘭子、伊達里子、村瀬幸子
花岡菊子、鈴木歌子、葛城文子

投筆郎弥之

子母澤寛氏原作 「キング」連載
二川文太郎監督、杉山公平撮影
林 長二郎 主演
オール、スター、キャスト

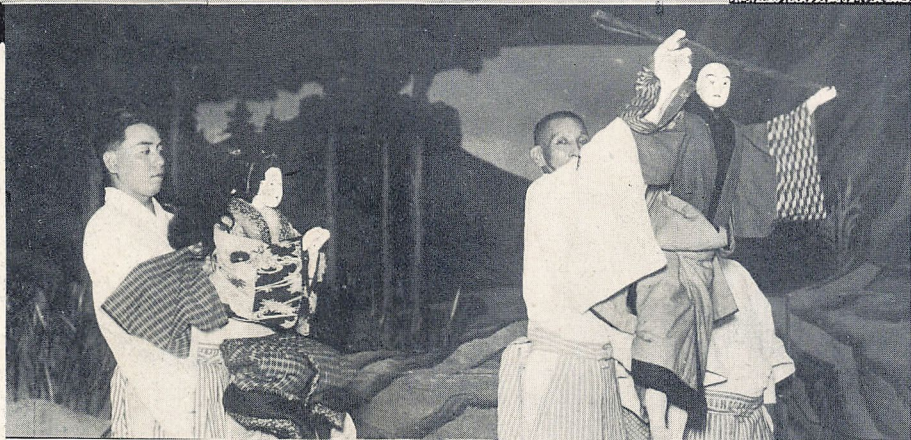
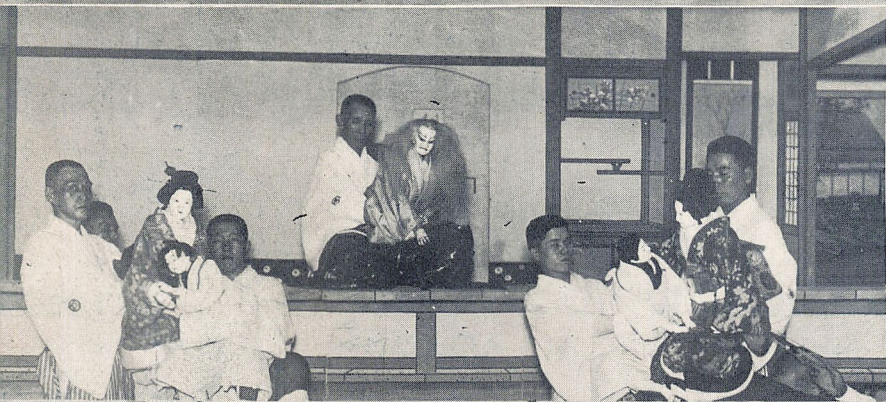
松竹キネマ株式会社

九月・文楽座

ひらかな盛衰記 // 逆櫓 //

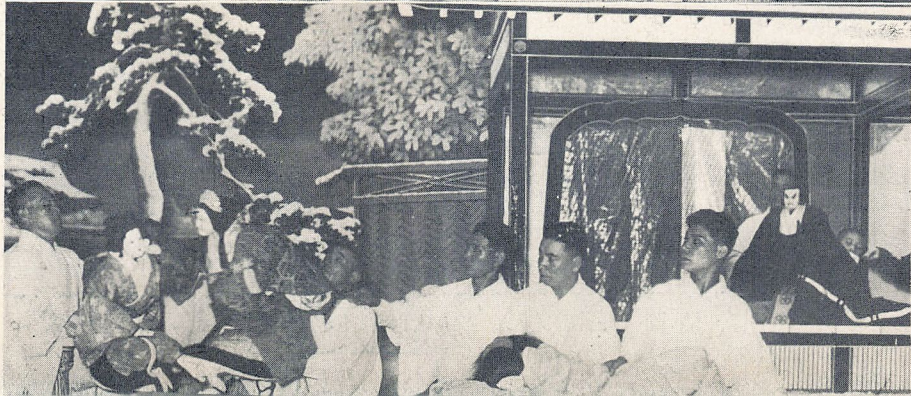


蝶花形名歌嶋臺 // 小阪部館 //



三十三所壺阪寺

// 谷間の場 //

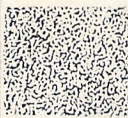


鶴山古跡松

// 中將姫雪責 //



郎三彦 八彌の戸舟・郎五菊 衛兵茂形駒 **“入俵土刀本”**



我孫子屋おつた
九月十日より南座
波一里の儀十
彦三郎



福助

最も効果のある
宣傳には優れた
印刷物の御利用
が一番です！

大阪市西區江戸堀南通二丁目

親切・美麗
迅速・正確

プラトン社印刷所

電話土佐堀・七九九・九〇七番

御饗料理

築紫

お芝居の

お帰りを

せしおまら

いたし

居ら

道頓堀松竹座前

電話南

四九四
八八八
四四二〇

“ 船 辨 慶 ”

靜 御 前
知 盛 の 靈

菊 五 郎
菊 五 郎



九 月 十 日 よ り

南

座

松竹大レヴユウ

神戸松竹劇場



“虹” 若山千代

櫻本千經義
郎五菊 太 権

十日より南座



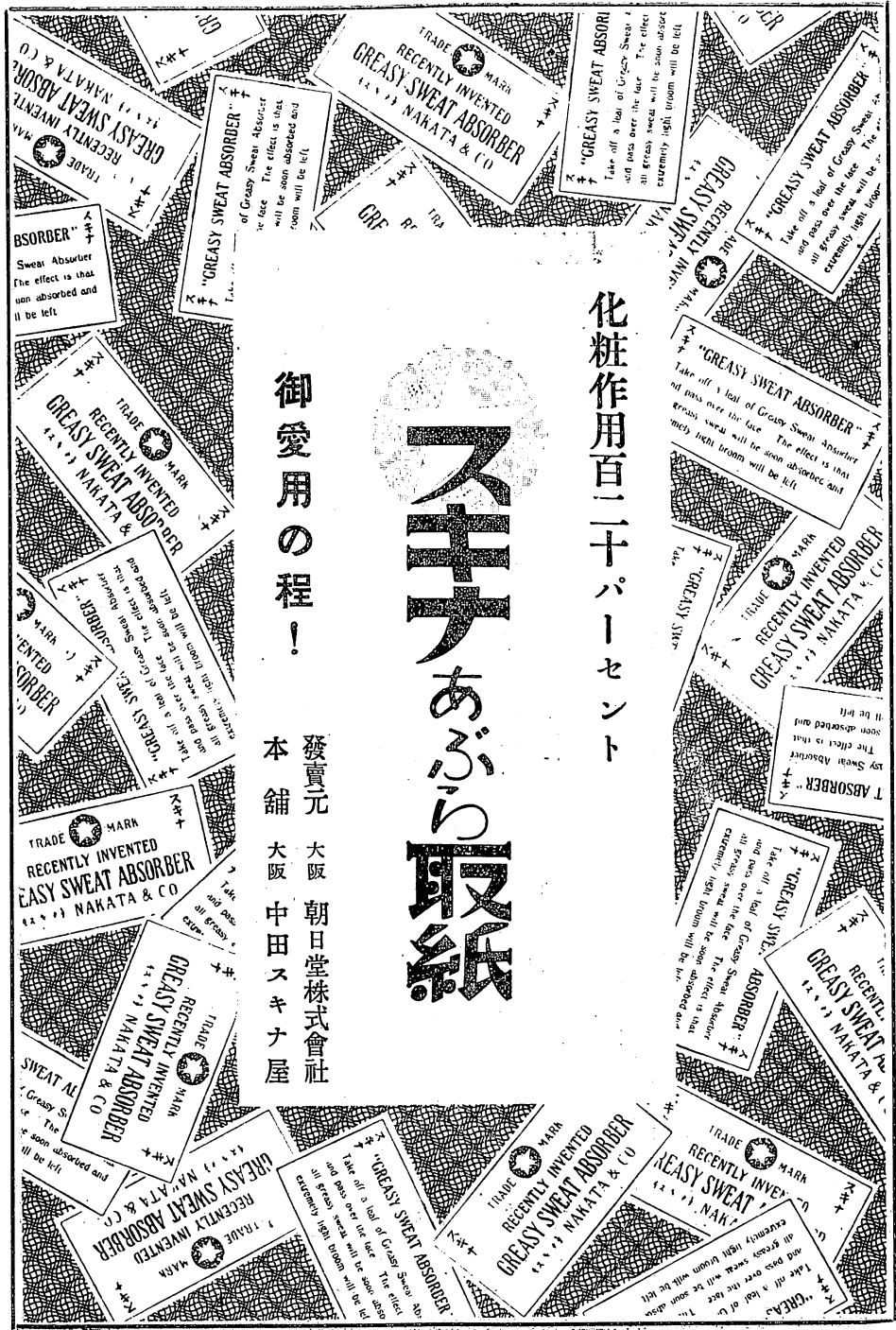
瀧
澄
子

化粧作用百二十パーセント

スミナあぶら取紙

御愛用の程！

發賣元 大阪 朝日堂株式會社
 本舗 大阪 中田スキナ屋





裂 小・具道小

貸 衣 裳

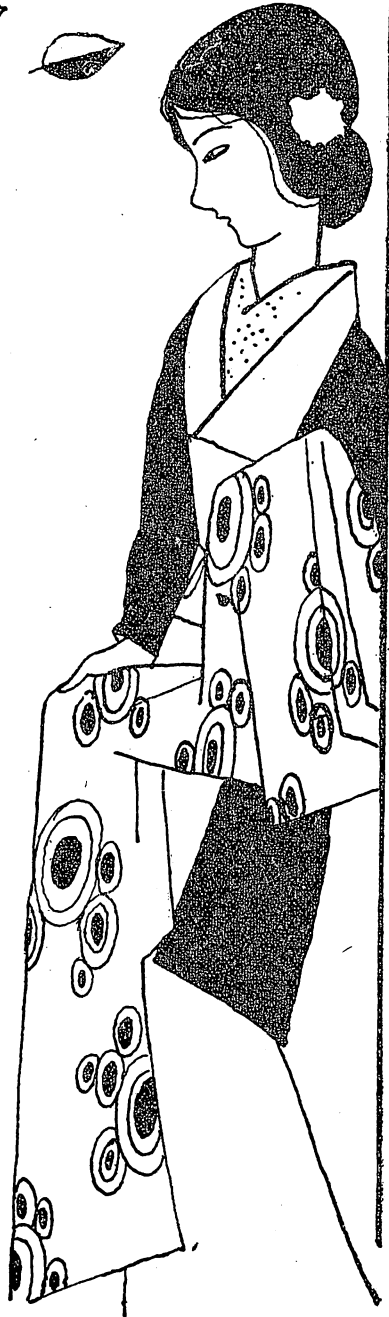
(其他一般の衣裳多少に不拘御利用下さい)
御來客の御相談に應じ便利よく取計ます

素人演藝會
宴會の催物
春秋溫習會
婚禮の衣裳

松 竹 衣 裳 部

本 店
東京支店

大阪市浪速區南坂町松竹ビル内
電話 戎 五 六 三 四 番
東京市淺草區並木町十五
園電話淺草五五九九番



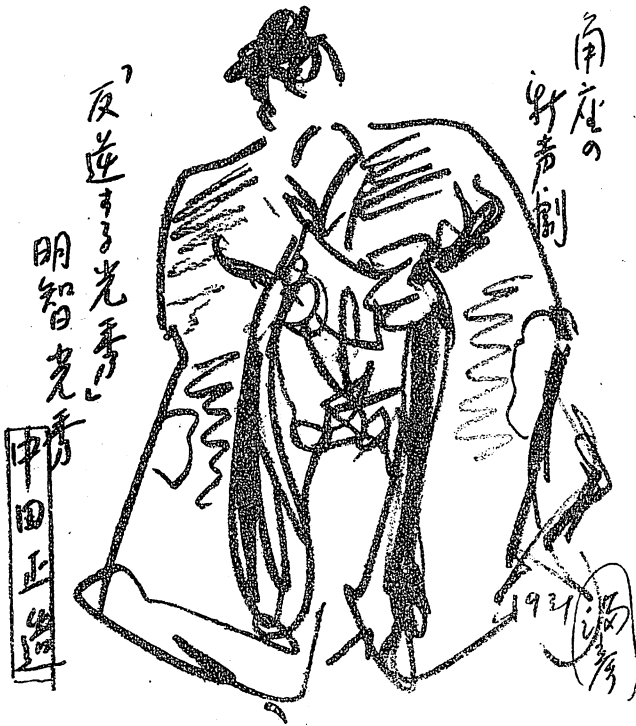
月刊・演劇研究・雜誌

九月號

演劇類編

第六年

第十六輯



中田正造

日本女優の二明星

— 水谷八重子と尾上菊枝 —

林 久 男

想へば我邦の歌舞伎劇こそ世界の演劇史上實に驚くべき存在である。阿國の女歌舞伎がたとひ念佛踊から由來したものであるにせよ、それは西洋劇が多くは宗教劇から轉來したものと其趣を異にして居る上に地の語りは希臘劇のコーラスとも其性質を異にして居り、殊に淨瑠璃の操人形と相助の發達をして來た爲に、泰西劇などには見られない種々特殊の複雑な要素が織り込まれて居る。

併し、何と云つても、歌舞伎劇を最も特徴づけるものは女形の存在である。支那劇などでも且といふものはあるが、寛永六年に男女共演が法度になつて若衆歌舞伎が起り、初めて女形が生れて、歌舞伎劇に特殊な形態を與へる

に至つたのである。其後、荒事、和事、敵役などの外、女形に於てどれ程多くの名優を出したことであらう。芳澤あやめ(初代、四世)、瀬川菊之丞(初代、三世、五世)、中村富十郎(初代、二世)、岩井半四郎(四、六、七、八世)、澤村田之助(三世)、それから明治の中期から後期、更に大正から今日の歌右衛門、梅幸、宗十郎、福助、松薦などに至るまで女形の名優は到底枚舉に遑ない。

處が又明治中期頃から女芝居といふものが擡頭して來た。併し彼等の多くは自ら男形を演ずるといふ所に誇りと人氣の焦點があつた。例へば市川久米八、所謂三崎座一派の松本錦糸、阪東鶴枝、市川鯉喜之助、澤村紀久八なんといふ腕達者が揃つてゐた。

明治後半には九代目の遺子翠扇旭梅の姉妹も一時舞臺に立つたが、多くは所作事に終始してゐた。何と云つても、女優が女優を勤めて舞臺の一半を占めることに向つて躍進的進出を促したものは川上貞奴と松井須磨子とであつた。須磨子と相伍して山川蒲路、林千歳、衣川孔雀、木村梅子などが出て明治四十一年には帝劇で第一期の女優養成を企てたのであるが、その頃から方々の劇團でも次第に女優を用ゐるやうになつて、大正に入つては有名無名の可なり多數の女優が舞臺に上るやうになつた。大正十三年に築地小劇場が興されてから

は眞に藝術本位の女優が漸く進出するやうになつて來た。此間に又一方、映畫は急劇の發達をして、舞臺の女優が映畫に入つたり、スクリーンの女優が臨機ステージに立つやうなことも流行して、此二つの藝術がいよく接近する機會をも作つた。

この間にあつて、種々の誘惑をよそに、専ら演劇と舞踊のステージに踏みとどまつて珠玉の如く光つてゐる二人の女優がある。水谷八重子と尾上菊枝とである。前者はさながら古くから光りつゞけて居る紅玉を思はしめ、後者は新たに光を放ちはじめた碧玉を思はしめる。

八重子優を初めて舞臺に見たのは、もう十數年前の「闇の力」の中の子役を勤めた時であつた。自分は翻譯者として、抱月、吉藏、春曙の諸氏と其の舞臺稽古にも立ちあつたが、須磨子、澤田等の火の出るやうな熱心な稽古に引かれて、たいげな彼女も驚くべき熱意を以て、殆ど徹宵にわたる稽古を勵んでゐた頼母しい姿は、今尚ほ目に残つてゐる。その後長い年月、彼女は本當に至純なる心をもつて藝道にいそしんで來た。天性の明るさと若々しき純情をもつ彼女は、多く娘形又は若夫人に於て成功して居る。「葉櫻」の娘、「驟雨」の恒子、「黎明」の禮子、「大尉の娘」の娘、「受難華」の壽美子、「富岡先生」のお梅、「紙風船」の若き妻、「明眸福」の珠子、その外

翻譯翻案物では「椿姫」のマルグリット「毆られる彼の少女」、「クレプトメーニア」のゲレリス・ロー、「天晴れウオング」のファンニー等に於ける彼女の藝風を見ても、その役柄の特長がよく看取されるのである。彼女の藝には朗らかさと純情とがどんな處にも見のがせない。一方「巧緻にして豊麗」といふやうな批評もうけてゐる。相當に教養のある上に海外の芝居や映畫をも實地見學して來た爲か、その藝には明るいモダニズムが支配して居る。「八重ちゃん」時代には其セリフの抑揚の中に須磨子式の一種の癖もまじつてゐたが、今ではその殻をすつかり破つて、彼女一流の清澄なセリフまはしを作りあけてしまつた。「受難華」に於て花柳の桂子や、英の照子を向ふにまはして彼女の壽美子は、その天真なる性格を遺憾なくふつくり描き出してゐた。「黎明」の禮子は其セリフ廻しに稍々藝術座風のネバリが耳についたが、少しも達者がらずつと引きしめて、つゝましかに喜多村の母親につきあひ殊に父と兄との口論を隣室でぢつと聴いてゐる娘らしい細かい氣持は到底女形役者には表はし得ない程の上出來であつた「ウオング」の中のファンニーの役は寧ろ岡田嘉子などに打つてつけのやうな柄柄ではあるが、それをし彼女が雪洲を對手に立派にしいかしてゐたのは、いよく其の藝の柔軟性を留はせるものであつた。「椿姫」のマルグリットは、たしか昭

和二年九月の本郷座が初役であつたが、其後再興藝術座の地方巡業で屢々手がけた上に、横濱喜樂座についで昭和三年一月角座に、正邦のアルマンと小織の父親で出した時は、もうすつかり手に入つたものであつた。

實は自分は可なり以前から私かに感じてゐたのであつたがこの椿姫によつていよいよ其感を深くしたのは、從來彼女は専ら朗らかな派手な役どころの女優とばかり見られてゐたが寧ろ濕つた憂や淋しみを含んだ、しつとりした役柄に驚くべき精緻な藝をもつて居るのではあるまいか。元來椿姫の如き戀にのみ生きるやうな役柄には彼女には肌違ひであるとして初めから危まれてゐたのではあるが、此劇の前半に於て公爵の寵愛のもとに華やかな社交的生活をして居る所よりも、寧ろ後半の隠棲の場、殊に病が篤くなつてからの場面は、全く吾々の意表に出た出来ばえであつた。聞けば彼女は初めこの役を引き受ける際に、「大勢が酔つて踊り狂つたりする蔭で一人静に濕つほく哀愁的な情緒を出して見たい」と注文したさうであるが、これこそ彼女自らの藝の行くてを知つたものではあるまいか。此點については、永くつき合つた喜多村も云つて居る。世間では八重子は明るい無邪氣な派手な藝風の役者とばかり見なして居るが、俺は寧ろ憂のきく、どつちかと云へば濕つた方面の役者だと思ふ、黎明の娘なんか其い、證

據だ」と。如何にも自分も其感を同じくする。現に此九月興行に明治座で「嬰兒殺し」の女土工や、「浪子」の主役浪子を受持つことになつたことは、いよいよ彼女の特質を深めてゆくことを暗示して居るやうに思はれる。

八重子は果して單なる美しい紅玉ではなかつた。彼女の其しつとりした澄みきつた藝味は寧ろ其の舞踊の方面によくあらはれてゐる。その「鶯娘」は梅幸や菊五郎などの男優の本格的のそれとは一種異つた情趣をもつてゐる。最近の「唐人お吉」の踊にしても、華やかなうちに其の人物のやるせない淋しい諦らめが滲つて居るのが見られるのである。思ふに、彼女の藝の圓熟は今後いよいよその藝を内面的に深めてゆくことであらう。斯くて女優水谷八重子は、嘗て其の先輩にして恩師たる松井須磨子が我が女優史に劃したと同じく或はそれ以上に、永く女形に占められて來た位置に代るべき女優の進出に對して一時期を劃することであらう。

更に又、恰も東天の新星の如くに我が劇界に其の清澄な姿をあらはしたものは、六代目の秘藏弟子尾上菊枝である。彼女は云はゞ碧玉の如く瑯玕の如く碧み澄みきつた藝風の持主である。芳紀まだ二九を出でないのに、少しもうはつた所がなく、複雑な女性格を齎すべき精緻と内面性をもつて演

出する理解力と技能とは、よしそれが主として六代目の周到なる指導の下に精進琢磨した賜物であらうとも、正に劇界の一驚異と云はなくてはならない。彼女の藝の本質をなすものは言ふ迄もなく舞踊である。その瞬間毎に完璧の彫刻美をあらはすやうな舞姿は「羽根の禿」などに於て六代目の天才を髣髴せしめるものではあるが、たとへば其の「鶯娘」などに於ては、故人榮三郎のそれに於てのみ見ることを得たやうな言ひ難き清素幽寂な詩趣をあらはすのを見るのである。更に演劇の舞臺に於ては、例へばかの「第七天國」に於て、雪洲のシコオを向ふにまはしてダイアンに扮した彼女が、あの若さで、あの（少しませ過ぎたと思ふほどの）落付きと、巧緻と、熱意と、内面性をもつて観客を引き入れていつた其の藝の力は、正直な所、吾人には大なる驚異であつた。自分は何となく獨逸の天才的舞姫インペコーフエンの藝を思ひ出さざるを得なかつた。若し水谷八重子が獨逸の人氣女優ケー・ドルシユのやうな方向に進むものとすれば、女優としての菊枝はマリヤ・フラインカ、イレエネ・トリーシユのやうな天才的巧緻な藝風に進んでゆくのではあるまいか。兎に角八重子や菊枝の藝が他に見られない純眞さをもつてゐるのは、その本来の性格から來てゐるものであらうが、若し二人とも此まゝに傲らずたわまず進んでやまなかつたらば、我邦將來の

演劇に於て女優の位置を立派な星座におくべき輝やかな明星となることであらう。

「劇場は人間的認識の進化に従ふべきものである」とメーテリンクも云つて居る通り、演劇は所詮時代の推移に従ふべき運命をもつて居るものでありとすれば、長き傳統を有する我邦の歌舞伎劇も、たとひ小山内氏が喝破したやうに「歌舞伎劇は既に滅びて、その殘骸のみが存在して居る」といふ程でなくとも、何れは時代の支配を受けなくてはならない。少くとも従來の女形は次第に其席を女優に譲らなくてはならない運命をもつて居る。それ程に次の時代の歌舞伎女形は既に凋落の徴を示して居る。その時にあつて初めて演劇の女優は其の在るべき位置におかれるべき日が來るのである。そしてそれは決して、スクリーンのクローズアップによつて宣傳せられ唯だ一時の間に合せに演劇の舞臺を踏む所謂人氣女優によつてではなくして、眞に舞踊や演劇の基礎的素養によつて築きあげられたる純眞なる女優によつてでなくてはならない。

日本女優の將來の象徴としても、吾人は此の二つの紅玉とサツアアと輝く日を待たれるのである。（八月廿五日）

尾上菊枝と舞踊

永田龍雄

菊枝は可憐な女性だ。

菊枝の、あのうつくしい顔は、なんと言つても可愛い、眼から鼻にかけて、そして口もとの締めぐあい。——の可愛さ、日本女性のもつ優しい美しくさが漂よふて居るのだ、美が小じりなりと溢れて居るのだ。

菊枝は小柄だ、だから舞踊家にむく、神経が指のさきにまでゆきわたつて居る。と言つて神経質なのではない。あどけなくふくよかだ。そして軽快だ。

西洋でも日本でも舞踊家は、どちらかと言へば小粒だ。アルジャンチイナは、あれは特別だ、サカロフの妻君でも死んだパウロワ夫人でもフホキン夫人でもみな小粒だ。真珠のやうな感じだ。

六代目だつて三津五郎だつてさうだ、六代目だつてそんなに大柄ではないだらう。露西亞舞踊のニジンスキーでも、現在ではアントン・ドウランでもやはり肉體建築は小柄で靱い。

舞踊家はらんまりとして居ないと見た眼にもほんくらに見えていけない、且つ大柄だと總身に智恵がまわりかねるから、美の表現には缺點ができるのである。

アメリカの男性舞踊家などで、むやみに長身で、丸太棒が踊るやうな無恰好なのが、伊藤道郎君などの一團に居たのを見た人があらう。あれなどは小じんまりした日本の舞踊家を見た眼から言ふと美の破壊者だと言つてもよいだらう。

わが尾上菊枝はこの點から言つても、自然ない、踊手なのだ

そして美しい顔が造物主からの贈物として彼女はもつて居ることも心強いのだ。

菊枝は芝居もまづくはないが、どうも、をどりほどはえない舞臺が小柄だから存在がともすると忘れられがちだ。女優として見る菊枝はまだく、前途が遠い。

彼女の現在は舞踊家として、よき藝術をもつて居るのだ。彼女の生命は、この舞踊家として將來は伸ひるものと、わたしは思ふ。よく新派などにまじへて彼女を出演させて居るが、どうも女優としては幾多の疑問がある、まづ第一は其肉體である。

いまの役者は、ともすると舞踊に逃げたがると六代目の俳優學校に關係するわたしの友人がこぼして居るのを、過ぐる日聞いたことがあるけれど、菊枝のやうな女性には、どうしても舞踊道に邁進させねばならぬやうに、宿命的に彼女に組まれて居るやうにわたしには思はれてならぬのである。

彼女の舞踊には美しくカタがある。腰にも年のわりに或るすわりが見えて居る。キマリもわるくはない。そしてなによりも美しいのはその軽快なる弾みである。彼女は師匠に求められぬ女性としての春の弾みがある。

逍遙博士の舞踊作品中、いちばんわたしの好愛する「良寛」の子守に彼女は扮して踊つた。——これはわたしの見た最近の

彼女のをどりである。

彼女の子守は良寛初演の時はしう、かがなつた。再演の時の彼女の子守は、しう、かよりもよりの、子守であつたことは言ふまでもない。

そのしう、かは再演では初演で高助の演じた馬子をやつたが、これも香ばしい馬子ではなかつた。高助の馬子には飄逸なるユ一モアが自然に成動をして居た。しう、かにはそれができなかった。しう、かは初再演とも良寛舞踊中では生彩がなかつた。

菊枝の再演の時の子守は實に自然ない、子守のできで鞠あそびのをどりのところは殊にい、できて、一味の新鮮な律動さへ湧いたのである。

良寛の子守ぐらゐる、現在の彼女にはまつた新鮮なをどり役はないだらう。八重子でもだめだらうし、や、岡田嘉子に白羽の矢を立てるくらゐなものだ。ほかのをどりのできる女優では断じてだめだ。それくらゐ彼女の良寛の子守はい、できだつた。

こんど紅梅になつた團十郎の孫娘だつてあ、は生きぬだらう。こんど大阪で、彼女はなにをやるかわからぬが、大阪人に見せたいのは、良寛の勤彌、馬子の高助、子守の菊枝で、舞踊劇「良寛と子守」を見せたいものだ。

彼女の型をぬけたとにかく新鮮なをどりがあれによつて

わかつてもらへるからだ。ほかのうらわかい女優の踊手では、あゝも新鮮な自由さがその織にもとめられないのである。

彼女のをどりにたふといのは、師匠六代目のもつふくらみの傳統的踏襲だ、このふくらみが自然でおほどかであるほひがあつていゝのだ。そしてふくらみのうちに弾みが心にくいまでに潤くのだ。

菊技のをどりを見て居て新鮮になるのは、彼女が見せるといふ意識がなくあくまでうちこまれた技巧を懸命にそれで居てギコチないところを微塵も見せぬところは彼女の舞踊的天分ゆたかなるためである。

彼女の技が圓熟する日が來たら、かなり完全なるをどりを見ることが出来る。たゞ心配なのは彼女の肉體のどれほどまで大きくなるか、いまのまゝでとまつてはこまることである。舞臺しか見ぬ彼女のことだから、わたしは彼女がいくつになるかさへ知らぬほどである。可憐な舞踊家と言ふ感じから優美なる舞踊家になる日を彼女の上にわたしは期待するのである。

それと同時に、わたしは彼女の古典的舞踊教育から新時代の感覺を生む舞踊家になる教育を彼女にほどこしてもらひたいと思ふのである。それだけの感情教育を自由に與へてやつてもらひたくわたしは思ふのである。これは西洋音楽で舞踊衣裳を着て、「胡桃割」を醜くをどれと言ふ意味ではない。童謡遊戯のやうな小品舞踊のみつくつて、衣食のための新舞踊家をこしら

へると言ふのではない。

ほんとの舞踊藝術の殿堂に、堂々たる風格のある新日本の創造的舞踊を菊枝によつてさへけてもらひたいと思ふのである。菊枝には世界的の名舞踊家尾上菊五郎が嚴としてその背景にある。古典を鍛練して新らしき感情の舞踊へゆく大きな舞踊家が居るのであるから、彼女にも、さうしたところに開眼をさせる必要が將來はあらうと思ふ。

その將來への準備として、いまからでも新しい感情の裝飾は、その舞踊藝術の上にも與へられて居てよからうと思ふ。それでこそ彼女が潑刺として生き、そして牙え、光り「十八カラツトの舞踊處女」として燦としてかどやく事であらうと思ふ。

言ひ忘れた。

若き女性のをどりはとかくにロマンチックすぎる傾向があるそれが菊枝のをどりにはない。これは師匠のしつけが嚴格な賜物だと思はれる。彼女のをどりのふくらみには、それだからロマンチックがなくて本格のふくらみがある。あまくないふくらみ、そしてあの軽やかさ。

わたしは彼女をすこしほめすぎたかな、いや、さうでもあるまい。(丁)

樂しかつた樂劇部時代

浦波 須磨子

暑い寒いにかゝはらずいつも思ひ出すのは樂劇部時代の事です。

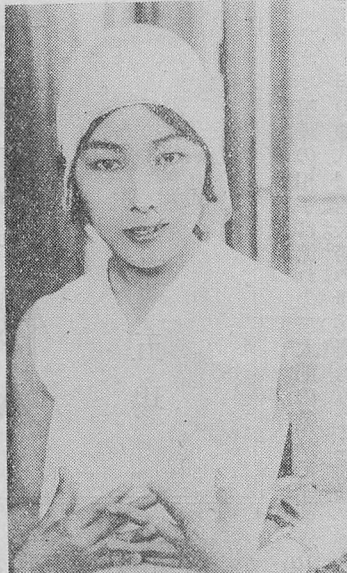
その當時私が生活してゐた頃の樂劇部と此の頃たまに昔なつかしさに訪れる樂劇部とは可成り大きな隔たりがあるやうに思はれます。

それだけにあそこを訪れる度に一層自分のゐた頃の樂劇部がなつかしく思ひ出されてならないのです。

松竹座に樂劇部が新しい踊りやバレエを發表する度に私は大がい大阪へ出掛けます千早さんが丈夫の頃はよく二人で出掛けましたが、この三月月程千早さんが病氣で出られなくなつてから、寂しいが一人で出掛けます。

此の頃樂劇部の踊りを見るにつけても思ひ出されることはレヴュー全盛以前にそこの私の姿です。若しあの頃、今日のレヴュー全盛があつたら私にももつともつ

と華やかな思ひ出の数々があつたかも知れないと事です。



●●●子磨須波浦●●●

い盛りの日中をものかはとばかり汗みどろになつて劇しい練習をした自分達の姿を一通りの稽古が済んで一休みとなるとイの一番に走つて行つてアルミニウムのカップに續け様に二杯も三杯も水をのんだ時のあの水のうまかつた事。

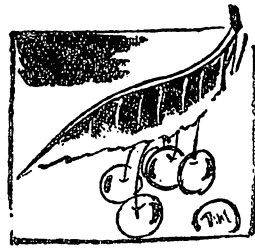
樂劇部を去つてもう何年たつたことでは松竹京都スタヂオでゾブの素人から長二郎さんの相手役をしたあの日から日は長く流れてゐます。

これから先、もつと長い日が流れても忘れられない樂劇部の生活、なつかしい思ひ出の日です。

原稿御依頼の手紙がひどく遅れて手に入つた爲め落ちつくして書いてゐることが出来ませんことを残念に思ひます。締切日が大分過ぎています。合つたら大變幸福だと思ひます。

樂劇部時代の數多い思ひ出は何れ別の折にお話しする機会があらうと思ひます。今日はこれで失禮。

×
今は夏、道頓堀のベエヴメントがとけて流れさうな暑さですね。
樂劇部時代の夏を思ひ出します。あまり廣くない風通しも決してよいとは云へません。稽古場で殆ど赤裸に近い姿で暑



◇ 演上行興月九座南都京 ◇

長谷川伸作

一本刀土俵入

二幕 五場

取手宿我孫子屋

常陸の國取手は水戸街道の宿場で、利根を越えると下總の國、渡しは其處の近くにある。

我孫子屋の料理人や帳付け、酌婦のお吉、お松迄が往來へ出て、見えもせぬ道向ふの喧嘩を見て居ると、横町から雪崩を打つて人が逃出した。

喧嘩の相手は流れの三太郎の乾分で船戸の彌八、若夫婦の伊兵衛おみなに因縁付け、仲裁する伯勞の手から馬の杵を奪つてヒツ敵いたが、伯勞と伊兵衛に打倒されると、跳起きて我孫子屋の内へ飛込んだ。伊兵衛夫婦や伯勞は逃げて仕舞ふ體で肌脱ぎになり、刺身庖丁を持って往來へ飛出した彌八、悦も通り蒐かつた駒形茂兵衛を追廻す。

茂兵衛は年頃二十三、四、力士志願で立科磯右衛門の弟子になつたが、見込がないので興行先から追拂はれ、親方のお内儀さんに縋つて歸參を願はうとまた江戸をさして行く途中だが、一文無しの飢じさで力が無い。先刻から二階の障子を開け、擬と見下して居た酌婦のお葛、疝癪を起して杯洗の水を彌八に浴びせるが、彌八は親分がお葛に首つたけなのを知つて居るので、癪に降るが手出しは出来ず、行掛けの駄賃に茂兵衛を蹴倒したか、頭突きをカマされて引繰返り、流石の無法者も跛をひき乍ら引揚げた。

茂兵衛を呼留めて、母親の墓の前で横綱の土俵入が見せ度い計り、石に咬みついても横綱に成り度い一念を聞くと、お葛は思はずホロリとする。越中八尾の生れのお葛にも、遠く別れて母親が戀しいのだ。泣顔を隠したお葛は八尾の名物小原節を喰つたが、別れて行掛ける茂兵衛を再び呼止めると、巾着ぐるみ有金と櫛

簪など惠むので、茂兵衛は嬉泣きして禮を述べ、今日の恩返しには屹度横綱になる誓ひの、別れを告げて行く後姿、お蔭で見送つて居ると、松戸の彌八が仲間無法者を連れて駆着け、お蔭を打のめしに我孫子屋へ躍込んだ。

利根川渡し場

渡船が漕出した跡へ茂兵衛が来る。途中の飯屋で喰べて来たので、先刻よりずつと元氣がい。先づ北公の川の中へ翻筋打たせ、組付く良公と升公を叩き倒した茂兵衛は、長脇差に手を掛けた彌八がお蔭をすべたと罵り、子守ツ子の背負つた赤ん坊が、お蔭の生んだ父無し子だ……と云ふので、猛然と怒つて彌八を殴る彌八達が逃出すと、子守娘に話しかけた茂兵衛、背中の赤ん坊がお蔭の子なのを確かめ、なあ、その子、父なしッ……と云ひかけて言葉を切り、そらした眼が葦間を這上つた北公に落ちるので驚いた北公は川へ飛び込んだ。

布施の川

前暮から十年程経つた頃は春、所は下總國も利根川沿の布施で船頭親子が船を立てて居る處へ、旅姿で遣つて来たのは駒形茂兵衛、彼れから角力をやめてグレて入つた博徒仲間十年前と較べると、體も心もぐつと引緊つて見違へる様だ、茂兵衛は可憐な言葉つき、老船頭に取手の我孫子屋の事を聞いて見ると、我孫子屋は流れの三太郎が買取つてから潰れ、尋ねるお蔭の事は老船頭も船大工も知らず三太郎の跡をついだ船戸の彌八なら知つて居るかも知れないとの返辭。で、茂兵衛が仕事を妨げた諸びを述べ、取手へ行つてお蔭の行方を探る氣の、下の渡し場指して行きかけると、波一里儀十の乾分おぶの甚太、籠彦、堀下根吉の三人が飛んで来て、矢庭に笠を捲取り、三方から掛かるのを指倒し、人違ひと聞いて譯を訊ね、賭場荒しのイカサマ師と間違へられたのを知ると、それも似た處なしの

違ふだらけ、茂兵衛はきびく窘めて川下へ急いだ。

根吉達が呆れて居ると、波一里儀十が乾分筋市と溢れ浪士河岸山鬼一郎を連れて来て、イカサマ師が此頃取手に来て居る奴と分つたので、是から仕置に行くんだと、根吉達も連れて上の渡し場へ立去つた。其跡へ船師彫師辰三郎が来たが、老船頭に聲を掛けられて、逸散に逃げ出した。

おたつの家

此は取手の宿場外れ、子の愛に引かされて獨身のお蔭が鈴を賣つて、娘お君と貧しく暮らす一軒家である。船戸の彌八の乾分北公を案内に、此お蔭の家へ遣つて来た波一里儀十達は位牌に俗名の書いてあるお蔭の亭主、船師彫師辰三郎を出せと理不盡に、お蔭母娘を押付けて家探しをしたが、辰三郎の姿は見えないので、見張りを付ける事にして彌八の家へ引取つた。

「キブス煉齒磨」

本品を使用すれば幼時より老年に至る迄歯牙を完全に保つ事が出来ます。何故なれば、キブス煉齒磨は刷子がとどかぬ微細な間隙へ侵入して常に歯を美しく清潔に歯を保つ事は取りも直さず身体の健康を計るのでありますから毎日二回必ずキブス煉齒磨を御用ひ遊ばせ、さすれば気分は爽快になられます。

本品は美しきアルミニウム罐入りで桃色の固煉製であります。有名な百貨店、薬店及化粧品店に賣つて居ります。

- 大形 壹個 金七拾銭
- 大形 中味 壹個 金六拾銭
- 小形 壹個 金四拾五銭

ロンドン パリス デイ・エンド・ダブリュー
 日本代理店 株式会社
 キブス株式会社
 横山商店
 東區豊後町三番地

と、其跡へ辰三郎が歸つて來た。初めに見る娘お君と抱合つて、嬉し泣きに泣いた辰三郎は、志州鳥羽港に居てお君の事を聞き、歸心矢の如く戻つて來たが、裸一貫では敷居が跨がれず、イカサマ博突で金を捲上げて來た事を話し、儀十宛の置手紙に金を残して、女房子と共に立退かうとする處へ、お君の唄ふ小原節でお君の家と知つた駒形茂兵衛が訪れ、十年前に受けた恩義に禮を述べると、茂兵

衛と聞いても思出されぬお君の前へ金包を残し、素早く門を出たが又引返した茂兵衛は、お君さん、子供をキツチリ抱いてご亭主の傍にびつたり付いて、此の家から外へ出るな、あらかた形がづいたらその時あ、親子三人、志す方へ飛んで行くのだ……と言置いて外へ出る。

お君は漸と思出して、茂兵衛の事を辰三郎に囁く。

同表

駒形茂兵衛は儀十達を残らず打倒してお君達を呼出し、名残を惜ひのに道を急がせると、あ、お君さん、棒切れを振廻してする茂兵衛の是が、十年前に櫛簪巾着ぐるみ意見を貰つた姐さんに、せめて見て貰ふ駒形の、しがねえ姿の備綱の土俵入でござんす……と後姿を見送つて獨言。

路傍で拾つた話

— 山口俊雄 —

血湧き肉躍る大野球戦に毎日真黒になつて甲子園に日参してゐたのに野球大會が終つてからはなんだかある物足りなさを感じて仕方がなかつた。今日は九月興行の稽古が早くすんだので久しぶりに放送局の足立さんを訪問した。放送局はいつも忙しきうだが殊に足立さんは忙しい、でも僕の顔を見るとすぐ

「ヤア……丁度いゝ、これから盆踊りの會へ行かう阪急沿線池田の自然幼稚園だ。そりや藝者の手踊りもいゝが又異つて純真そのものだ、心が淨化するぜ、さアすぐ行かう」

まだ僕が何も云はないのに自動車で阪急へ、そして池田に着く、なるほどやつて居る、一瞬のすぐ近くの原の真ん中へ櫓を組んで幼稚園の保母さん達が四五人

いともあざやかに三味線を弾いてゐる。そして橋詰園長の打つ太鼓の音につれて櫓を取巻いた百人ばかりの可愛い幼稚園の子供さん達が紅葉のやうな手を振り、

「京の東山……ビョン」
と新作童謡の盆踊りを踊つて居る、その可愛らしい事、中に三ツか四ツ位の子供さんもまぢつて時々手を振つては踊つてゐる可愛い事、抱き上げて食べてしまひたいやうだ、子供好きの二人は眼を細くして見とれました足立さんとはうゝ子供の中心に入つて踊り始めた、がまだ一度も踊つた事が無いのでその踊りつぷりの變なのとをかしい事、見物の人達は、大笑ひ、さすがの足立さ

んもへこたれた。

それから足立さんは會衆と子供にお話をする事になつた、流石に童話家の足立さん巧いもんだ。笑はせ泣かせ緊張させる間に子供達にとつて自然がいかに必要か、童話童謡遊戯がいかに子供達にとつてうれしいものであるかを判り易く話された、ところがその後で足立さんは遂々僕を引張り出してしまつた、こんな所でお話をした事が無い、それに子供さん達が澤山居られる。サアむづかしいで、困つた、然し僕は子供好きで通つて居る。コードモ黨の一人だエ、マ、ヨ度胸をきめたが初舞臺の時の様だ。落着いてゆつくり、子供さん達に判るやうにおしやべりを始めた。自分では何をしゃべつて居るやら、涼しい野外だといふのに背中汗びつしより。でも足立さんは上出来々々々これから童話を少し稽古して方々へ講演に行かうかとほめてくれた。亦踊りが始まつた、美しい唄が星空にひびくと可愛い子供達の手が踊る、足が踊る僕は今夜セリフを暗記せねばならぬので早く失禮して歸つたがあの清らかな星空の下で天女のやうに純な子供さん達の美はしの光景はいつまでも、僕の頭にこびりついて消えない。都會人にとつて自然そのまゝの美しさはどんなによるこぼしいものであらう。美しい夜を興へて下すつた幼い子供達に感謝してその純な氣持でセリフを暗記しやう。

その一 安土南蠻寺の客殿

静かな安土の郷に、一際きわだつてエキ
ソティックな切支丹宗の大威寺と云ふ寺
があつた。今日は右大臣織田信長公が御
成りになるのだ。連歌師里村紹巴も招か
れて早くから参上してゐた。信長は寵臣
森蘭丸や千代壽を伴に参殿した、外人宣
教師オルガンチノは信長に黒奴三人を
献上した。信長は殊の外満悦の様子だつ
た。

反逆す

芝居見

鳥江鏡也作

「肌色の變つた黒んぼが俺の家來か、面
白い。表面は
忠義に見えて
も少しも俺の
命令に従はぬ
惟任日向守よ
りはましぢや
日向守は肌の
色も毛並も同
じ人間だが、
俺の心と彼奴

とではまるで石と鐵だ。俺は日向守が嫌
ひぢや」

なみ／＼と酌がれる異國の赤い酒に舌
鼓を打ちつ、信長は好きな蘭丸ばかり
に話しかけるのだつた。とたん、飛彈一
聲、弾は信長を外れてマリヤの像に喰ひ
込んだ。何者の仕業ぢや、曲者を詮議せ
い」

その聲のまだ終らぬ中に短筒を持つた
信長の重臣細川藤高が曲者を取押へて出
てきた。曲者は女、小姓千代壽は驚いた
その曲者こそ、末を誓つた戀人かなめで
はないか、千代壽の狼狽に二人の戀は哀
しくも明るみに出て了つた。信長は二人
に繩打つた。

「小童の分際でこの信長の命をねらうな
ぞ、身の程を知らぬ大白痴奴、何故俺を
ねらつたのぢや。誰に頼まれたのぢや」
「誰にも頼まれませぬ。私一人でやつた
のです上様は私にとつて憎い敵、私は先
年上様に滅ぼされた攝津伊乃菰木村重の
餘類です。女の身の私一人、亡君の恨み

を晴らさう考へでした」
「うむ憎き奴、不義者である許りか俺
をねらふ不屈者、蘭丸、直二人をぶち斬
れツ」

「は、ッ、では兩人を庭前へ引出して斬
りませう。そして、せめてもの情に、あ
の庭に咲いた櫻のもとで潔よく死なせま
せう、兩人立てツ」

仇は討てなくとも戀の満足に死んで逝
つたかなめそして千代壽。蘭丸に二人の
氣持がわからう筈はなかつた。蘭丸は信
長に愛せられたい稚子心、それが彼のせ
い一杯の望みであつた。信長にとつても
蘭丸は彼の又とない大切な者であつた。
折柄光秀が目通りを願つて來た。

「何事ぢや」
「恐れながら」
と、光秀は甲州惠林寺焼討の不可を述
べ、諸山佛寺征討の布令の誤つてゐる事
を諍々として説いた。が、光秀の諫言は
却つて信長の怒りに油を注いだやうなも
のだつた。聞入れられやう筈はなかつた

秀光る

また

演上月九座

蘭丸はかなめ
と千代壽を斬
り捨てた旨を
言上した。

「さうか、よ
く斬つた。蘭
丸、その方に
何の褒義をや
らう。何なり
と望んで見

い」「はい、有難う存じます。では、私
奴にいつかは亡父三左衛門が舊領近江丹
波を下さいませ」

光秀の手が小刻にふるえてきた。蘭丸
は愉快だつた。いつか光秀の娘秀子を嫁
に懇望して拒まれた腹いせさまア見ろ白
蠟の様な美少年蘭丸の唇が、信長にし
どけない秋波と共に笑つてゐた。

その二 安土光秀の邸

殿様の御見舞参上と云ふ振れ込みで紹
巴は左馬之助やその他明智の家臣のゐる

前で、南蠻寺での出来事を一撃一笑誇大
して皆に話してゐた。聞いてゐる左馬之
助の興奮は非常なものだつた。紹巴の歸
つたあと、左馬之助は皆のゐる前も構は
ず男泣きに泣いてゐた。花おほろな春の
宵、降り注ぐ月の光りに何處ともなく聞
こえてくる手すさびの横笛……

「どこで誰の吹く笛やら——哀しい音色
ぢや」

何気なく云つた自分の言葉に誘はれて
光春は又涙がこみあけてきた。

「あの蘭丸奴不法にも明智の領地丹波近
江を望むなど不埒ぢや。眞實上様は蘭丸
にその二ヶ國をお渡しになるに相違ない
まことさうなれば、この明智の家はどう
なるのだ。思へば上様の度々お憎しみ上
様はこの明智の家をお潰しになるお考へ
だ」

「左馬之助どの、左様なお言葉はこの際
お慎みなされ」さう云つたのは光秀の左
手とも頼む齋藤内藏の助。

「いや、齋藤、それに違ひない。若し上

様がさう考へてゐられるならそれでい、
我々は飽迄も丹波近江を死守せねばなら
ぬ。いくら上様だからと云つてどんな屈
從にも忍ばねばならぬと云ふ筈はない
のだ。

「左馬之助どの——」

「いや、齋藤云はしてくれ……云はして
くれ。皆んなも知つてゐるだらう。あの
丹波の八上城で敵手に倒れた母上の事を
……あれは一體だれがあんな端目に導い

たのだ。八上の城主波多野秀治が吾か陣
門に降つた時俺にとつてはタツタ一人の
母、伯父上に取つても小さい時からの育
ての親、その大恩ある母上をいかに戦國
の憤ひとは云へ人質として城にあづけた
あの時、上様が秀治を安土に召されて助
けてさへ下されば、母上は死なずにすん
だのだ。それが既に降服してゐる者に詰
腹を切らせるなど情も涙もないお仕打ち
だ。上様があの時手を下さずとも母上を
殺させたも同じだ。上様が何ぢや、信長

(五十一頁へつづく)

成瀬 足を觸つてみましたか。

飛鳥 いゝえ。

山上 菊五郎の芝居で何が好きです。

飛鳥 「紅葉狩」や「子守」を見てすつかり

感心してゐます。よかつたわ。

林 かむろの小娘の後姿をくづさないのは菊

五郎です。娘型として菊五郎はいつも後姿

に苦心してゐる。全くつゝしみがありません

よ。

森 役者は後姿を大事にせなければならぬ。そ

で二月でしたか、野崎のお光は大變な評判

でしたね。

高谷 飛鳥さん、菊五郎から藝の話はありま

せてくれたか。

飛鳥 ありません。何分樂の日で十時に打上

げて十時五十分は汽車に乗らねばなりません

んほんの一寸した間でしたから、汽車を外

したつてかまふもんかと菊五郎さんから強

つてのお招きでした。

山上 飛鳥さん、これだけで結構です。樂屋

へお引取り下さい。

飛鳥 さよなら、よろしく。(退場)

林 菊五郎が今は京都へ來るのに就ては何か

譯があるのですか。

松本 別に譯といつてはありますまいが、六

日に東西松竹合併があり、鷹治郎が上京し

て菊五郎と仲よくなつて京都へ來ること

なつたのでせう。大阪より早いのは劇場の

關係だと思ひます。

森 鷹治郎も八方でせうが、菊五郎も八方な

處がありそうですよ。

成瀬 菊は無愛想だといひますね。

林 氣どりやなんでせう。

森 氣に入るとよく喋るらしいですよ。

成瀬 勘彌とは違ふな。じよさいない點が少

いんだらう。菊五郎はいくつです。

森 吉右衛門より一つ上の四十七歳で、勘彌

と同年です。

成瀬 近頃瘡せたんぢやないか。

森 瘡せたとはいふよりしまつたのです。

成瀬 野球、水練などの運動をやつてゐるか

らだな。

山上 高谷さん、菊五郎は今度で京都へ二度

目だと聞きますが、前回の時のお話しをし

て下さい。

高谷 え、京都へは二度目ですが、松竹の

手では先年大阪へ一度出てゐますが京都へ

は今度が初めてです。十六年前に來た時は

青邊クラブの山松の手で來たので、その時

の乗込は素晴らしいものでした。東京から

仕事師連中が大勢附添ひ七條驛から南座へ

木遣り華やかに長い列をつくつて繰込んだ

もんです。大正五年でしたよ。

山上 何を出してゐましたか。

高谷 「だんまり」「新血屋敷」「道成寺」「三千

歳」「三社祭」が面張りで、二の替はりに三

津五郎の「あやつり」「千本櫻」椎の木よりす

しや「棒しばり」「面賣り」でした。

山上 すると菊五郎は二度京都へ來て、二度

とも「すしや」を出す譯ですね。

高谷 そうです。前は菊五郎のお里がとて

もよかつたが今度の福助も期待されますね。

林 私は正直な所六代目ファンです。吉右衛

門と並んでのひいきですよ。藝がひろいか

ら五代目よりよくなると思ひます。それに

頭がよい。理智を藝の力で追ふ處がえらい

一時女形としてのせりふが美でなかつたが

此頃はそれもよくなつて來ましたね。

森 新作物の時はせりふが低い時があります
成瀬 東劇で見た沼津の時なんか聞えないで
弱りましたよ。

森 處が世話物の低い調子は割によく通る時
がありますよ。

林 菊五郎が市村座時代から喜劇に對して特
徴を持つてゐることは感心です。それに彼
の藝にはユウモアが滲んでゐますよ。

成瀬 權太にしても延若と違つて悪の中にも
ユウモアがある點はいいよ。

森 私は、菊五郎で「生きてゐる小平次」の
やうな新作ものが見たいと切望します。

成瀬 僕も岸田君の「生命を捨てる男」の如
き勸彌と共演の新作ものを見たいね。

林 菊五郎は創造力が多いです。古典的な物
を演つても型をくづさないで、それでゐて
菊獨特のもち味を出す點は感心しますね。

また型ものをやつてゐる中にも自から新し
がらないで持ち味を出す點もいゝと思ひま
す。

森 時々人の意表に出やうとする事がありま
すね。

林 それはいゝ意味でのアンピションです。

俳優學校を創設して自ら校長になつたこと
など通例です。

森 私は菊五郎の眞價は今後、新作もので發
揮されるのではないかと期待してゐます。

林 六代目は大根時代なしに來ましたね。
高谷 左團次やその他の人には大根時代があ
りましたね。

成瀬 延若とよく似てゐて、なんでも出来る
人だね。

森 「忠臣蔵」を演つても出来ないのはおか
るぐらゐなものだせう。

林 それになにを演つても一通り以上は演り
ますよ。

成瀬 延若と違ふのは悪どく感じられない點
だね。

高谷 土地の柄でせう。

林 喜劇を演ればそれがよく解りますよ。

高谷 血が違ふんですね。

成瀬 「すしや」の權太なんかその適例だ。
高谷 「すしや」より「権の木」の方が菊五郎は
面白いでせう。

森 「権の木」が演れたら一人前の俳優だとい

ひますよ。
高谷 「権の木」では菊五郎では世話がゝるか
も知れませんがね。そうなるらと權太とは違つ
て來ますが……。

森 いや、今にして思ふと五代目が新演出を
して、自家薬籠中のものとした點はえらい
ですね。面白く運ばれてゐるぢやありませんか。
あれほどの演出が出来れば、よほど
腕は冴えてゐるんですな。

高谷 「千本櫻」でも「権の木」は捨てられてゐ
たのですが、六代目が演つて當つたので舞臺
へ出るやうになつたのですが、結構な事
ですよ。

森 團藏なんか「権の木」は面白かつた
らうな。

林 九代目團十郎に育てられた菊五郎が、九
代目に成りたがらない點は、素質がよいの
でせうな。全く天成の世話物役者ですよ。

高谷 權太にしても菊五郎は腕白者、延若は
悪者といふ感じがします。

成瀬 それは自分が出て來るのだよ。

山上 一番目の「千本櫻」に就てはこの位で
止めまして、申幕の「船辨慶」に就て、こ

これは森さんの獨演會としますか。

森 「船辨慶」は梅幸氏がこの間の顔見世に出しましたが、六代目はより一層本行に近い演出で、自から梅幸氏とは違つた味を見せることでせう。而も六代目の方が若いだけに身體の自由は利きませう。「船辨慶」は能の方でも「紅葉狩」などと同じやうに、前が女、後が武將の(怪士)を見せるので、演者の方言ふと演り榮えのするわけで、これは能も芝居も同じです。能に「黒頭」「白式」とか「白浪ノ傳」とかいふ所謂小書、つまり替への型がありますが、それらを芝居では取入れて、成るべく芝居らしく華やかに編成してあります。然し、能曲を殆んど本行通りに真似てやることは能を知らしめ見物には面白いかもしれませんが、能を知つてゐるものには、どちらも缺點だけが眼に立つらひがあるものです。能や狂言から取材しても全然違つたものに翻案され、結構ですが……例へば「うつぼ猿」とか「關の扉」とかのやうな風に脱化されるものが出来れば面白いと思ひます。

山上 どうも有難う。ちや、二番目の新作長

谷川さんの「土俵入一本刀」をひとつ。

成瀬 中央公論に載つてゐましたね。

林 私は作品は讀んでゐるが、今度の菊

五郎では一番期待してゐますよ。

森 大變面白いもんだそうですね。

成瀬 食満君は原作を讀んで面白くとは思は

なかつたが、菊五郎がよく演活してゐると

言つてましたが、私も期待してゐる一人です。

山上 それにあのいつも上品な役ばかりして

ゐる福助が、小料理屋の女を演りますが、

これがよいそです。すると福助にしても

新しい藝地を開拓したことになりませぬ。

成瀬 菊五郎の藝を向上さす點から言つても

今後はどしどし新作を提供すべきだと思ふ

森 そうです、そうして新作物を開拓して行

くと菊五郎はもつと盛上つて行きますよ。

山上 高谷さん、最後に菊五郎來の概觀を仰

しやつて下さい。

高谷 今度の菊五郎の出し物が悪いといふ評

判をちよつと聞きましたが「千本櫻」の權

太は延若などと違つた味はあるにしても、

この前にも出てゐるので、以前も權太、今

度も權太で、見物が權太を並べるのも無理

はありませぬ。「船辨慶」も京都のやうに見

物の眼に能の親しみの多い土地で本行のもの

は不得策だと思ひますね。「一本刀土俵入」

これが楽しみですね。然し、また來る次の

機會のために「鏡獅子」などの切札は残し

てあるのだと言へばそれまでですが、能が

りのものよりはまだまだ狂言風のもの、

方が歌舞伎化されてゐる所が多いだけい

でせう。

山上 大喜利は「乗合船」ですが、相當紙數

も重ねましたから、此の位で……。

松本 どうも、皆様有難うございました。

山本修二、南江三郎の兩氏は俄雨のため

出席遅刻されましたのは残念でした。

紙上舞臺

『青天井』

— 中座九月興行上演 —

難波小橋——ルンペン庄九郎の居室(?)のある河岸だ。

上手に尊師の足場がある、それが庄九郎の家だが、庄九郎は不在らしい、僅かに筵を引きまはした足場の下は宵暗のこむるにまかしてゐる堤の上の通りでは、蟲賣と枇杷葉湯賣りが蝸んで居る。

其處へ、盲目の花賣娘お花が、花籠を提げて出て来る、籠の中には賣残りの花が淋しく暗の中に香つてゐる。

枇杷葉湯賣りの爺さんは娘をいたはりながら傍の拾石にかけさせる。

其處へ、庵の平兵衛と、刻印の千右衛門が、賭け事かなんかの争ひをそのまま持ち越して出て来る、二人が掴みかゝらんとすると、手先の梅吉が通りかゝるので、そのまま何處ともなく去つて行く。

ひとしきり、こうした騒ぎがつゞくと蟲賣も

旅鴉一本刀と

— 不職渡世の仁儀作法 —

行友 李風

何分斯うキビくとして、胸の透くやうな三尺物をと、新聲劇主任の庄野君から相談を受け、その註文に適ふやうにと取あへず、筆を着けたのが此の「一本刀」二幕四場——今歳三月箱庭の櫻の蕾が、ヤツと色ついた頃でした。ところが、その月の雑誌に長谷川伸氏の「一本刀土儀入」それから「源太時雨」が掲載されたので、もしや同氏の作品を真似たといふ疑ひを受けはしなからうかと、内心聊か不安さを感じましたが、デモ肝腎の内容が全然違つてゐる點が、安堵の胸を撫下したといふやうな次第です。

同劇團の俳優の都合や、いろ／＼な事情で、櫻が散り、夏が逝き、涼しい秋風に迎へられて舞臺の脚光を浴びる事になりましたが、一體この作は關東の長脇差、いはゆるヤクザ稼業の一本氣な、男の意地、渡世の面目といふ物を描いて見ました、例に依て甚だ拙い作物ではありますが。

俗に「御判形の裏をゆく、商賣往來にない稼業」といふ通り、自らもマタ不職渡世、更に略して渡世人、業人などと稱へます、その癖仲間同士の交際仁儀の上には可成り嚴格な極めや、掟や、制裁や、誰から仕初めたともなく種々雑多の不文律が設けられ、どんな大きな間違ひや、出入、達引に臨んで

【く 視 を 屋 部 者 作】

枇杷葉湯賣も、荷物を擔いで去つて行く。

あとには盲目のお花がたゞ一人……。

ルンペンのお庄さんが歸つて来る。

お花と庄さんは突き當る。

お花は倒れる、

花籠は飛んで、花が散る。

——氣いつけんかい、土阿呆め、吃驚するやないか。

——濟みましね、勘辨してくらつせ。

やさしいお花の聲に、庄さんすつかり面喰ひ

ちつと、暗の中をすかして見る。

——はムム、姐やん、心配せえでも、今の

てんごや、お花がわやム。

庄さん、俄におとなしくなつて、小娘をいた

はりながら、花を拾ひ集めてやる、しかも、花

賣と聞くと、その残つた花を全部買つてやつた

が、お花が盲目であると知ると、彼の同情は益

々深くなつて行く。

お花の眼は障眼なのだ。そして、彼女は俄盲

目なのだ。

庄九郎は、同情と、そして、もう一つ、若い

美しい女に對する妙な期待(?)も手傳つて、

女の身の上話を、根柢り葉柢りして尋ねた。

——お母アさんと二人ぎりて

も、決して職分以外の人々の世話、厄介にはならないのが慣例でありました。

喩へば身内が敵に殺されたとしても、「御判形の裏をゆく」以上、飽

までそれを、公沙汰にしないで、仇も怨みも自分達の腕で報ひる、公儀の威

勢や上役人の力を藉らない、ソコに渡世の意地と面目と、男の魂とが躍動

しました。

「一本刀」の主人公鹿沼の源太は、決して親分だのお貸元だのといふ豪い人

物ではありません、土足裾折、長い草鞋を穿く旅人の身の上、ソコには何か

事情があつて、親分の手許を放れた渡り鳥、これを仲間では「旅人さん」と

呼び、客分扱ひにもすれば食客扱ひにもします、それが當人の腕次第、

度胸次第である事はいふまでもありません。

最も自身に

繩張を有ち、

駒箱を控へて

納つてゐる親

分達には、そ

れ相當の業體

世間體といふ

物があり、第

一歳を老てる

るから——こ

の劇中の若荷

屋のやうなの



本統に御亭主ありやへんのか。

え、そんなもの……

—そして如やんのうちは何處やね、

—そんなこと、聞いて下さらねえだつてよ

うございます、

庄さん、とうとう小娘を怒らせた。

然し、庄はんは決して悪氣のない男だから娘

だつて、一寸、怒つて見せたゞけて、なんでも

なかつた。

そして、庄さんは娘と別れて、彼の住居へ、

(土手の下の足場)降りて行く、お花は、杖をた

よりに、立ちあがりかゝると母のおききは、歸

りの遅いお花の身を案じて、家守の勘右衛門と

一所に探しに来た。

しかも、勘右衛門は、あわれな親子のために

眼病の名醫で、長崎から最近にやつて来た醫者

の事など話した。

だが、その醫者にかけるためには、五兩の金

がなくてはならない、が、僅か三兩の金の工面

もつかない現在の親子なのだ。

五兩の金が出来なければと不動寺の灸の話を

する。

川の水に、手足を洗つて、冷々する河岸にそ

のままごろりと横になつて居た庄九郎は聞くと

もなく、貧しい親子の話の聞いて起き直つた。

は例外ですが——身分の重いといふ事を考へて輕忽な眞似はしません、歳の若い、身分の軽い、系累に煩はされぬ、血氣盛りの旅人などには、得てして源太のやうな無垢、純真で生地のみ、便宜上多く變名を用ひましたが、劇中の主要な人物は大抵實在のもので、便宜上多く變名を用ひましたが、時代は化政度、東海道では清水の治良長がマダ賣出さない以前と思つていたゞけば間違ひありません。

それから旅人の服装に就いて、裾の折り方一つにも、甲斐の三ツ山、駿州の二ツ折、巻返しなど、その國々で特種な風があり、草鞋の紐の結びやうにすら、各貨元の家々によつて流儀が異り、脚神のヤマの縹形を見たゞけても「彼やア何家の身内の衆」といふ事が直ぐに判つた位、隨つて挨拶の仁儀にも銘々極つた型があり、大同の中に幾らかの小異はありました。

イザ喧嘩といふ場合にも、之と同じく仕掛け上手、マタは拒ぎ上手と、それ〴〵得手不得手があり、笛送り、鐙送りなどといふ傳令の法もあつたさうですが、兎に角それを悉く舞臺に活用することは、至難でもあり且つその割に大した効果も擧るまいと思ひましたので、凡て在來、普通目馴れた最も無事な行き方にして置きました。

特に今回の配役を見ますと、大體において當を得た、危氣のない振方ですから、舞臺も定めし危氣のない、安心をして觀られる芝居になるだらうと、竊に期待して初日の開場のを待てるまです。話頭が、いろ〴〵に絡がり、その辭一向要領を得ないことばかりで何とも相濟ません。

だがルンペンの彼にも、金の工面はつかかなかつた。

親子と、家守の勘兵衛が去ると、雁金屋の若旦那文七が、友人の又三郎と一所に通りかゝる。文七は最近に世にもいとしく思つてゐた彼の妻に死なれたのだ、文七はそれがために悲感してゐる所だ、又三郎は見かねて、文七をなぐさめに、新町へでも連れて行かうとするが、文七はきかない、又三郎を撒いてしまふと、一しきり亡き妻に對する迷懷があり、文七は、遂に流れに身を投げる、が生憎川水は淺くて死にきれない、

足場の庄さん、この騒ぎに、びつくりして起き上り、文七を助けあげ、庄さん一流の哲學を披歴して、その不心得を悟す、
文七もすつかり、感心して、大店の若ボンとルンペンの庄さんは意氣投合……兄弟分になる。

難波小橋の背暗の中に偶然に逢つたあわれな花賣娘お花に投げられた庄さんの同情は、當然歸着する所まで行つた。
お花のためになら、たとへ、火水の中までもといふ純情が先づ、不動寺の灸の實地檢證を彼

□□□□□□□

一本刀士俵入と

— 戸並長八郎に就て —

長谷川伸

□□□□□□□

京都南座公演の「一本刀士俵入」は私としては前半が新手、後半はいつもの股旅物、さういふ作である。脚本は佳作でも何でもない——在り來りの謙遜でいふのではない、もう少し經たないと自分にも判断がつかないのだ——

菊五郎氏始め舞臺は大半以上が傑作佳作揃ひだ、嘘だと思つたら二度見てくださいである。

序幕の我孫子屋の戸袋の化粧塗喰は、今でも現存してゐる、過去



【く 視を屋部者作】

に思ひつかせ、炎の脊踏みには、布袋の市右衛門を使った、が、つくり言の市右衛門は炎の熟さに堪えかねて失敗した。
その次に思ひついたのは、曾根崎の娘相撲である。

これは、市右衛門の案で、餘り思ひつめた庄さんの氣持をくんで、五兩の調達のためにこの懸賞相撲に出かける事にしたのだが、それも完全に失敗——この上は、萬策つきて、難波小橋で、自殺を思ひ直させた兄弟分の文七ボンの所へ泣きを入れた。

相手が金持ちだけに、一も二もなく承知して呉れた、しかし、その夜文七の家には泥棒が入つたために、その嫌疑が庄さんにかゝつて來た彼は捕吏の手を逃れて、やうやく五兩の金はお花に渡したが、その次の瞬間には、捕はれてゐた。

二ヶ月の月日が流れ、彼の無罪が判り放免の身となつた庄さんは、天満天神の境内で茶店を出してゐるお花親子に逢つた。勿論お花の眼は治つてゐた。しかも、お花は五兩恵んで呉れた恩人をそれとなく探してゐたが、お花とて、まさかルンペンの庄さんが尋ねる恩人だとは思はなかつた。庄さんのあわれなすがたに、お花

の左官藝術の一つである。現存の物に見事な招牌もある。

多分、舞臺装置は小村雪岱氏の物に據るのだらうと思ふが、二つある利根川沿が實によく利根川を浮き出させてゐる。

ダンボリ師といふ職が判らないかも知れないが、繁昌した利根川沿の船棟梁のところには、いい伎倆の彫師がゐた、それをつかつたのである。船大工からいへば出藍の工人である。

菊五郎氏の茂兵衛は日本唯一と評されたものだ、福助氏のお蔭がこんな役は初めてだつたさうだが頗るいい。その他一々あけなないが、傑作佳作がガラにあるんだから、とても面白い。

×

「戸並長八郎」は東京同時の公演だ、ご存じの如く「大朝」「東朝」の夕刊に出てゐる小説の脚色されたもの。脚色は先輩がやつて下つた。

西の延若氏、東の猿之助氏、東西の主演者ともにこの役には特長をもつてゐる。私の「戸並長八郎」にはモデルがある、あんな人間はないと断定する人があつても、私には現存のモデルがあるのだから一笑に附してゐる。

「一本刀」の前半、後半の人物が違つてゐるといふ批評も聞いたが、私の経験に據るところがあるのだからちツとも違つてゐない。

私の如き過去をもたないものに見て貰ふ物として、それを書いたのではないのならば、考へ直さなくてはならないと思つて、今すこし迷つてゐるところだ。(八月十四日)

は同情して、金を悪まうとするが、庄さんは、お花から手拭一本を買って去って行く……

——お母さん、あの人もしや……
去って行く庄さんのあとを見送つたお花は、母親をかへり見てそんなに云つた。

それから後間もなく……。雁金屋へ入つた泥棒は庵の平兵衛で餘罪もあつたのか、天神橋で捕へられた。

曾根監督ご巡査

曾根純三と云へば「女給」以来、帝キネでは弗バコ監督の別稱さへある、有名な商賣上手の映画製作者である。

この人、映画人になるまでは大阪府曾根崎署の巡査をしてゐたと云ふ、昔をわすれぬ意味で曾根純三とペンネームでなくして、シネネームをつけてゐるさうだ。純三はジュンザウと讀んでなくジュンサと讀むんださうな。

これを聞いた御本人、ソネー、ジュンサイなことを云ふてもらつては困ると大變な鼻いきであるとか……。

南蠻繪の光秀

——反逆する光秀に就て——

鳥江 鍊 也

「日向、余の姿をよく見ておけツ」
刀を眞向に振上げた信長が、その下に小さく居すくんでゐる光秀にとど

た。
これが余の政治の構へぢや、余はこの構へで天下を握つたのだ、戦國の世に平和はない、武力だ、武力だ、劔だ劔だ！
信長のカン走つた聲が、セミナリヨの客殿にカーンと反響した。

これは「反逆する光秀」の第一幕の或るシーンである。私は、こゝで信長といふ武斷的政治家と、光秀といふ隠和なインテリゲンチヤの對立を描いて見た。そして事毎に信長はその暴君振りを發揮して、神經質な光秀をイライラさせるが、彼は考へて考へて、どこまでも忍従する。これ迄の芝居や淨瑠璃では、光秀の叛逆は一度か二度の信長との衝突事件から擧兵するが、實際はそんな單純なものではなく、また光秀として感情一點張りの人間でもなかつたつまりは、信長と光秀の抱いてゐる主義が違つてゐること、性格的に相容れなかつたこと、それから忘れてならないことは光秀一族の生活問題に起因し

行友李風作

旅鴉一本刀

二幕 四場

— 角座九月上演 —

1

若荷屋の幸右衛門

松崎の六平太

この身内が互に争ふ様になつたのは、甲州身延山お會式の當日、大野ヶ原の旅籠屋で、部屋の間違ひからであつた。

そこで若荷屋身内が、斬られも斬られた八人まで、枕を並べて斬殺されたのである。

幸右衛門はその復讐がしたかつたのだ。

2

たことである。

その頃、擴大強化され行く信長の武力は近江國安土山の築城に依て象徴化された。この安土城は信長御自慢のものだつたに相違ない。天正四年に起工して三年目に出来上ると、領内に向つて、希望者には拜觀を許すといふ布告を出した。

光秀の話とは少し線遠くなるが、こんど私の書いた劇中に取入れてある南蠻寺に對する説明にもなるので、安土城竣工から話を進める。

その自由拜觀を許された時、京都から外國宣教師のオルガンチノといふイタリヤ人がやつて來た。オルガンチノは度々これ迄安土にも來てゐるが、この際、見に行かすば信長の氣嫌も悪からう、氣嫌を書ねると宣教上支障を來たす、そこでノコノコ出かけて行つて安土の風景の佳いことや宮殿の美しいことを褒めちぎつた。信長は當然このイタリヤ人が氣に入つた、また外人宣教師にしても布教のために信長の權力を背景に持つことの損徳を胸勸してお追従である。それからオルガンチノが信長に喰入つて、京都から安土へ移住して來ると、家中の子弟のにめに切支丹の寺院と住家を建設することを願出で許された。信長はその頃既にもう非常な切支丹ごりになつてゐたので、このナポリ生れの宣教師は思はぬ大成功、所要の地面まで貰つてそこに大成寺といふ南蠻寺を建てた。天正九年にはアレキサンドロ、グリニヤニといふ印度人の宣教師が、安土と京都で二回まで謁見の榮を賜はつた。グリニヤニ先生も仲々如才なく立廻つて、一人の黒奴を信長に献上した。黒い肌色の人間を見た信長は、もうすつかり異國情緒に魅了されて、その先生の出願した學

一方、六平太は子分を連れて僅か四人で、遠州秋葉三尺坊へ参詣した。

その歸り道彌勒町で若荷屋一家は襲はうとしてゐるのだつた。然し、土地も違つた旅先で、子分の衆を呼寄せざる間がない。尤も初めから、若荷屋は六平太を襲はうとしたのではなかつた。一人娘のお稲がこの土地で麻藝者を勤め時々逗留に来てゐたからだ。

3

そこで、幸右衛門一味は急の場合この土地で多くの人数を狩集める。そうした一家が安倍川餅屋の前に通りかゝつた。

と、そこに旅装束の股旅者、久造熊十郎の二人に腕を貸して貰ふべく、すべての理由を話すのだつた。

勿論二人は承知した。

4

林建設を許可した。學林とはつまり當時の舶來の學問をする所で、校長格には大成寺のオルガンチノ和尚が起用された。そしてこの學林を安土セミナリヨ(Seminariu Anzuci)と謂つた。そして二十五人の貴族の子弟を收容した。信長は度々この學林にやつて來た、或時は日向の鉄肥城主伊東義益の子ジエロームが洋樂を彈奏して聞かせたこともあつた、漸時切支丹は盛んになりそれから後の調査に依ると日本全國に於ける信者の數は十五萬人、寺院は二百、宣教師は五十九人を算したといふ、すばらしい盛況だ、光秀より先に信長に謀反して討たれた攝津伊丹城の荒木村重も天主教信者であつた。

信長の切支丹ざりと、その反面的現象として佛教はどうだつたかといふに信長は天下の名僧智識に對して好感を持つてゐなかつた。坊主が嫌ひだつた。大阪本願寺の焼討、



だが、今一人この店にゐた旅人鹿沼の源太はそれを承知しない。

「俺にお男の意地がある、勝つても、負けてもそれが眞貨の無職の達引、金の威光で此奴等のやうな、雲助同様の人足を狩集め、加勢の力で、押し通さうなんて、俠客仲間風の風上にも置けねえ」

と、どうしても若荷屋に力を貸さうとはしない。

5

その上、源太は云ふ、

「知つた以上は持前の疔癩の虫が納まらねえ、頼まれねえでもアベコベに松崎の一家へ腕貸をするんだ。」

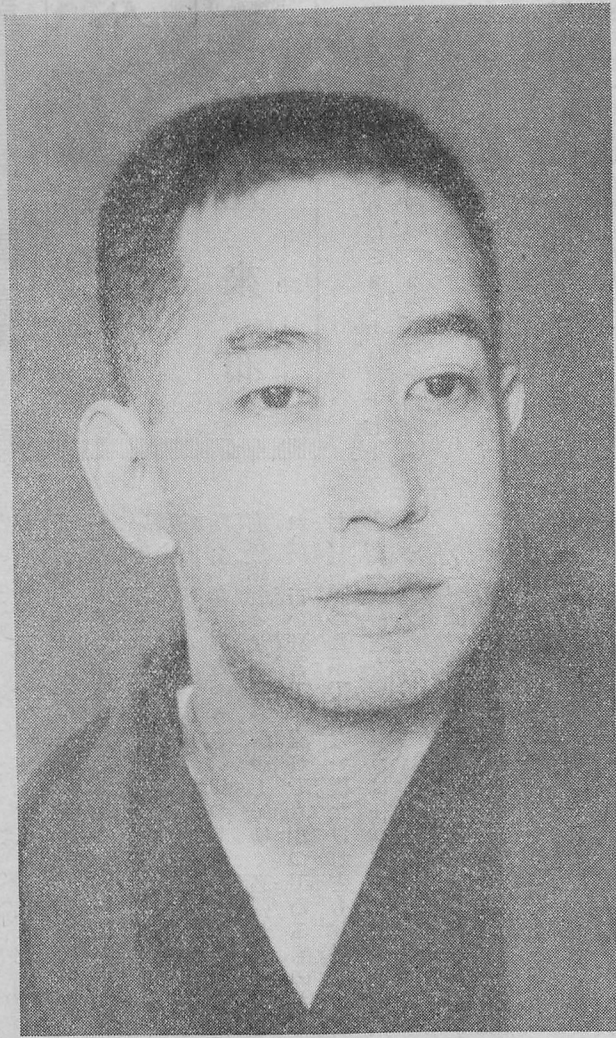
時に時刻は花曇りせる春の日の、暮るに近頃舞臺はこの駿府彌勒町安倍川餅屋の店先から繰り展げられてゆく……。

甲州惠林寺の焼討、それから高野山征討（これは準備中本能寺の變が起つて中止された）日蓮宗に對する壓迫など佛門に散々崇つた。私の解釋では、坊主共が賢い顔をして相當民衆の上に君臨し、信賴を受けてゐることが癪にさわつたのか、武人の號令においそれと服しないのに業をにやしたのかその邊に理由もあつたであらう。そんなどさくさに漁夫の利を得たのが切支丹である。

光秀を書いたものに、當時の斯様な社會狀態を取入れ、信長と切支丹信仰を描いたものがない。光秀はどつちかといへば佛教信者であり、佛典に通じた人だといふことである。だから、切支丹などは最も縁遠い人物であつたそれがこんど南蠻寺で幕をあげて、洛外切支丹墓地の雨さらしの十字架で幕をしめる、異色光秀として、大體は史實卷説を取交せて戯曲化した。誰かがこの芝居を見て『まるで第一劇場のマツだ』と云つた人がある、演出もそこをねらつてゐる。だから南蠻寺だの、切支丹だのといふカモフラージュを用ひたのだ。

切支丹の話が長延びて、かんぢんの光秀のことがお留守になつた。私はここで反逆後の光秀が孤立無援に陥入つて焦慮する寂さと憂悶に就て書いて見たかつたが、紙数がつきたので次の機会にゆづる。尚「反逆する光秀」の史料の出所に就ては明治四十二年刊行菅谷勝義氏著「明智光秀」及び西村真次氏著「安土桃山時代」その他に依據した。

自分で分る見違へる
 自分で分る見を歡び
 林 長 三 郎



商賣柄、毎日髻を當らなければならぬので、その度に、頬が落ちて居る事が馬鹿に氣になつてしかたがなかつた。
 すゝんだ醫術によつてなんとかならないものかとは餘程まへから思つて居た。
 とところが、今度例の脂肪注射による豐頬術が発見されたといふので、早速試みたわけです。施術後の経過もよく、結果も理想的なので、非常によろこんで居るわけだが、施術は痛かつた。痛いといふと子供の様だと云つて笑はれるかも知れないが、ともかく痛かつた。
 然し、元來私は齒が悪いので、齒痛にはよくなやまされるが、豐頬術によつて、この齒痛の方も緩和出来るといふ事だ。すれば、時々或はのべつ幕なしに興ひ來る齒痛の惱みを思へば、施術の時の一時的の痛さは位はなんでもない事だと思つて居る。

未だ少し腫れて居るが（八月二十六日）もう二三日もすればすつかり腫れも引くだらう。
 本當に自分でも見違える様な自分の近いのを喜んでゐる。

權太の丸み

入江來布

菊五郎丈が南座へ来るのは十七年振りださうである。十七年振りにやつて来て「いがみの權太」の颯爽たるところを痛快にやつてのける、たしかに新秋の一快適である。

その上に三津五郎丈が来る、福助丈が来る。三津五郎丈は「一生懸命、力演立舞仕る」と言つて来た。養助君も来るのだらう。それに對して大阪方は延若丈、魁車丈、市藏丈、長三郎丈、扇雀丈、どんな風に優々が氣焔を吐きたらう。殊に興味を惹くのは音羽家の權太に對して我が河内家が何を以て抗するかどうかである。老巧新劇家、氣鋭成騎家兄弟それ等上方諸丈の發憤振りが待望される。期待に中る歟、裏切らる、歟、櫓の上の秋天はいよいよ、高しである。

權太といふ役は、演じ方によつてどんな風にも演じられもし

見物の仕方によつてはどんな風にも見られもするので面白い。千本櫻の「すしや」は誰れでも知つてゐて、淨りに芝居に筋も運びもすつかり普及してゐるから一見固定して動きがとれないやうにも思はれるが、却つてそこに演出上の自由な境地在り放されてゐるから面白い。筋がわかり、型がきまつて一定の範疇のなかにあるやうで、却つてそのために、見物に對して特に筋を諒解させ、肚を解説してゆく必要がないとも言ひ得る。これは、古い狂言で、誰れでも知つてゐるものならば、別段權太だけに限つた事ではない様だけれども、併し、辨慶とか、維盛とか、義經とかではさうは往かない。權太の權太たる特異性はそこにある。

たとへば、權太の表現に、先づ二つあると言ひ得る、その一つは、權太の本性を始めから一貫させて行く演出、即ち、あと（へん）の變化を、肚で匂はせて行くやり方である。も一つは前段では飽くまで無賴漢に成り切り、後段でがらりと激變する反動的の演出、昔からいふ所の狂言の底を割らない行き方、どちらにも長所があり、特徴があつて、傳統とか、考證とかの上から見た正潤論は別として、今日の味ひからして見ればどつちの演出がい、ときめるわけに行かないし、またきめる必要もない。優人によつていろいろの權太が躍動するのが面白いのである。

菊五郎丈の權太は、どちらかと言へば、第一の方、即ち本性を一貫してゐる權太に屬すると思ふ。そこに音羽家の持ち味が

あり、獨特の壇場がある。丈の權太が、二重人格を用ゐない如く、舞臺上の權太と優の持ち味とが渾然一つになつて現はれるこれは昔流に批判する狂言の底の割るとか割らぬとかいふ第二義の問題を超越して、藝術的、第一義的にいふこと、思ふ。

「すしや」の様に、見物がすべてその運びを知つてゐるものに於ては、もはや底を割るとか割らぬとかいふことは問題ではない、否、さういふ事から言へば、既に見物自身が見ぬ前から底を割つてゐるのである。だから、斯種の狂言ではそんな事を問題にしないで自由で演出してゐる事となる。如何に自由に演出しても既に見物が大綱を知つてゐるから全くの方角違ひへ解釋される心配はない。

即ち一見型が固定してゐて動きがとれないやうに見えて而も自由境が開放されてゐると言つたのは此點である。さうして、此點に適合して性質一貫式の自由な權太を見せるのが菊五郎丈である、面白いと思ふ。

もう一つ興味のあることは、菊五郎丈の權太に一種の「丸み」を味ひ得ることである。

そつぽうが丸いといふのではない藝風に丸みがあるといふのである。

あの強い、たんかの切れる權太のなかに、一種言ふべからざる柔らか味が行きわたつてゐるのが嬉しいのである。この味ひは結髪新三などにも味ひ得られる。殊に面白いのは、權太に

於てこの丸み、柔らか味、または一種の女性味さへも仄見し得るに對して、道成寺などのあの艶麗さのうちに今度は反對に男性的の強さともいふものが仄見される。

これはたしかに菊五郎丈の持ち味で、その特色の發現であらうと思ふ。

斯ういふ風の味ひ方から權太——菊五郎丈の權太を見物すると又一種の新様を得得得できると思ふ。權太を、こんな風に見ること、即ち前段後段反動的に見ないこと、強さのうちに丸みを味ふこと、これ等は昔流に言つて異式異端の味ひ方であるかも知れぬ。併し、今日の觀劇態度、まあそんなむつかしい、理窟は言はずとも、ゆるやかに、心持よく芝居を見且つ味ふといふに於て、此の鑑賞方は諒解される事を信ずる。

さうして十七年ふりに四條橋畔に迎へた菊五郎丈の禮讚歡迎の辭としたい。

菊五郎丈の權太に對して、同じ得意さに自負する延若丈の享受する刺戟やいかに、その刺戟が反撥する持ち役の現出やいかに、その外の上方の諸丈、その互ひに蕪じ合ふ演出振りの、たとへば己に百菊の魁けするの絢爛を想像して併せて讚美しやうと思ふ。(八月、北陸客舎)

夏 日 藝 語

德 田 純 宏

X

世の中が不景氣で芝居の数が僅ない。

失業俳優がうよくしてゐる。働いてゐる俳優もパンにはぐれまいとして一生懸命だ。

舞臺上に於ける努力よりは、生活の安定を願ふ爲めの世渡り術の努力に一生懸命だ。

俳優の舞臺的墮落は、こんな時に招來されてゆく。

X

由來俳優に對して舞臺上の指導者は有餘つてゐる。

だが彼等に對する生活的、乃至社會的な生活權の保證を與へる指揮者は僅ないやうだ。

X

俳優は興行者から金を貰つて踊つてゐる人形で可いのか、そしてそれが生活的勞働としての器械化めいた物である可きか。

X

これからの俳優は、觀點の如何に依つて技藝の轉換が生じる筈だ。

X

鳥江氏の「反逆する光秀」が新聲劇團で上演される。今年の三月京都兩座で初演した物だ。

僕の推賞したい作である。

此作品には多分なイデオロギーが入つてゐる。

イデオロギーが盛込まれてゐるから良いと云ふのではない。人間的な光秀を描寫した處に此作の良さがある。

X

芝居らしい芝居には、すっかり左様ならをしてゐる今日の觀客に對して我々は一體何を考へなければならぬのだらう。

多彩な生活面の描寫であらうか。

非現實的な造り事の葛藤であらうか。

餘りにも近頃の演劇界は行當りばつたりな流れを見せてゐる

ブル演劇でも可い、プロ演劇でも可い。ただその物が傷だらけの姿や、模造品のな姿で現はして貰ひたくない。

外遊洪水時代だ、猫も杓子も渡米だとか世界漫遊だとか……

……甚だお達者な事である。

一體何が爲めに——曰く見學に。曰く視察に——。

見學や、視察の爲めに外遊してゐる日本人が、何等裨益する處なくして歸朝するかと思へば、たゞ漫然と日本の富士山や瀬戸内海を見物に來てゐる外國人が、飛んだ物を視察して歸つて行くのではあるまいか。

邦人が裸とバジャマとゴルフを輸入してゐる代りに外人がブラツクチエンバに輪をかけたやうな物を黙つて失敬して歸つてゐるのではあるまいか。

邦人の外遊者よ、行つた先で感心の囿りになつてゐないで少しは毛唐を感じさせて見ては何うだ。

でないは、徒らに視察だとか見學だとか勿體ぶつた言葉を振り廻さないで欲しい。餘りにそれらの効果か發揚されてゐないから。

外遊して感心する丈けならば誰しも共通だ。

「道頓堀」の編輯子は、僕に拙作「争鬪」に就いて何が所感を書いて寄越せと言つて來たが、僕は自分の作品に就いてその良否を問はず云々する事は苦痛なのだ。

同時にその勇氣もない。

勇氣はたゞ組上に乗つた作品に對する批判に堪え得る而已——。

(三十九頁よりのつゞき)

話を聞いた。この種の單純な人間の行動は、むしろ愛嬌に富んでゐる。いやに理詰の、故に義や俠を賣物にする市井の遊俠劇は面白くない。

それにして昔上方でかゝる暴力團發生の原因には、當時の歌舞伎狂言の影響が多分にある前にも一寸述べた如く「髮切島原」「八島々原」等六法末期の姿を寫した島原狂言が、現今チャンバラ映畫を見て、子供が眞似をするやうに不良性を帯びた少年によつて模倣されたのだ。江戸では不平等本が奴の風俗をして市中を荒したのが、やがて丹前六法の濫傷をなしたが、上方では歌舞伎が先驅をなしてゐるやうに考へられる。この説は聊か獨斷かも知れないが、まったく根據なきに非ずと私は信じてゐる。



蝶六の映畫入り

南部 僑一郎

舞臺と映畫とが、本質的に異つたミリユウを持つてゐる以上、舞臺の俳優が映畫入りをして、よき成果を齎らし得るか否かは、非常な疑問だ。私は映畫界に於て、この頃の舞臺喜劇の全面的

な動きをよく知らないが、時々見たものから考へると、随分、近代色を持つた、氣味のいゝ味を盛つたものが多くなつた。日本の舞臺喜劇が、一頃、永い間、大阪喜劇のドタバタものに終始してゐる間に、他の藝術域には、どんどん新しいナンセンスが發生した。映畫も、特に外國映畫は、チャップリン、キートン等を中心に、物凄い進展ぶりを示してゐる。

舞臺では、比較的このナンセンスの取入れ方が遅れて、この頃やつと、新鮮な喜劇が生まれて來たやうだ。専門的な喜劇の一座から、松竹家庭劇等にいたるまで――。

で、蝶六の映畫入りに就いてだが、蝶六の舞臺は、私は二三度しか見てゐない。だが、彼の持つ喜劇的要素が、身體の線の特殊な動きにあるだけに、映畫の効果としてあらはす場合、非常に條件はいゝと云へる。舞臺では臺辭と云ふ最も効果的な武器がある。對話のナンセンスは、その顔の動きや、身體のこなしに強調されて、非常によく、喜劇のモメントを作り出すことが出来る。だが、映畫にはその武器が全然排除されてゐる。タイトルと云ふ臺辭の代用をする古典的な存在はあるが、これは現在ではほんの、筋を運ぶ役目だけしか持つことは出来ない。大體、舞臺ですら、臺辭のナンセンスで芝居を見せることが一種の喜劇の邪道とすら思惟されてゐる位だから、特に、文學的效果を借りることを不名譽と心得てゐる映畫では、それは許せない。完全なトーキーでも出現すれば、臺辭の効果も生かされ

て来るかも知れないが、現在では考へられないことだ。トーキーでも完成され、ば、シユバリエみたいな男も現はれて来ることが出来るが。

この點、蝶六はよき條件のもとにある。彼は、キートンのやうに寡黙である。石のやうに黙りこくつて、それでゐて、あの荒唐無稽な笑ひのエツセンスを、身體全面から放射する。これは、素材としては、最も映畫的なもので、彼が映畫界へ第一歩を踏みこんだことは非常に妥當である。

だが、彼のこのよさは、現在では全然未知數だ。あの、彼の持ち味が、餘蘊なくヒルムの上に、再象出来るか否かは、斷言でき無い。彼の第一回作品の監督者として選ばれた、帝キネの曾根純三は、十中八九、あの味は出せると思ふんだが——と、撮影の第一日目に私に云つたが、この表現方法に就いては彼が一切を監督者に委せることに依つて、より映畫的になり得るだらうと思ふ。舞臺に於ける彼の持つよき藝風を、カメラライを通して、如何、それと同程度によくするか、又、より以上によくし得るかは、監督が一等よく知悉してゐる。

現在日本の映畫界には、はつきり、大衆のものとして存在してゐる。喜劇が少い。最近、蒲田の小津安二郎に依つて製作されてゐる數本の喜劇及、それに依つて發見された、岡田時彦の喜劇の片面は、餘りに、喜劇としては、高踏的であり過ぎ、ペーソスが多過ぎる。大衆は、あの中の、監督の規つた重要な

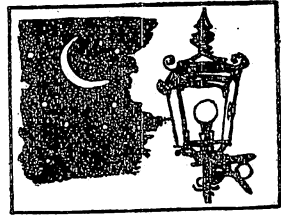
ユモアは、洗練され過ぎてゐて、味覺にのせることが出来ないだらう。その他の會社、日活にしる、東亞にしる、喜劇らしい喜劇を、代理映畫に於ては、ほとんど製作しないもし製作されたとしても、陳套な、今迄のものと、少しの距離もないのだ。

彼、蝶六は、こうした現在の中に踏み込んで來てゐる。彼が踏出して行く路は、非常に多い。そして、大衆は、新鮮な、哄笑の刺戟を待ち望んでゐる。彼は茲で、絶対に今迄に、大衆の見る事の出來なかつたものを投げ出す可きだ。

帝キネとしては、この、全然未知數である一素材を持つて來た以上、あらゆる努力を支拂ふことを覺悟してゐるものと思へる。唯一の現代映畫のスターである中野英治を出演させ、鈴木澄子を助演させ、商業主義的に、的を外さない折紙つきの監督曾根純三に仕事をさせてゐる。帝キネとしては、最高のコンデイションだ。

吾々は、日本の喜劇映畫界に、一人のユニークな存在を送ることが出来るかどうかと、瞠目して見まもつてゐる。一切の眼がこの新しいものに向かつてフォークラスされてゐるのだ。

蝶六と、喜劇映畫に於ける曾根純三の監督とに期待するものは私一人ではあるまい。



浪花五人男考

— 雁金文七と雷庄九郎 —

高 谷 伸

二本挿した憎くまれもの、侍相手に、景氣のい、喧嘩でも

見せると、そこらの格子に女郎のいろができる。びらの一束でも持つて撒いたり、演説會で中止を喰つて見せると、生かじりの女給のいろができる。時代がちがつても筋道に大した變りはない。それを、ちよつと色づけて、淨瑠璃にしたり創作にしたり芝居にしたり、戯曲にしたりすると大したものになる時もある。事實に價值があるのではなく、作品の價值でまゐるのである。その作品の價值が高ければ高い程、事實がつまりまらなくても、こんな事實をあれだけまでにと、逆に箔をつけられることさへある。精進料理でも庖丁さへ冴えてゐれば、うまい譯である。

雁金文七とその一黨、極印の千右衛門、庵の平兵衛、雷庄九郎、ほての市右衛門、以上の五人が幹部で、外にかいたて吉右衛門、喧嘩屋五郎右衛門、とんびの勘右衛門、からくり六兵衛などがワンサで、親仁の與兵衛といふのがシンパサイザーで

ある。

これらの男は俗にいふ阿波座がらすで、新町の遊廓をぞめき廻つては喧嘩を賣つて強がつてゐた半俠半賊の悪徒、この頃の言葉でいへば硬派の不良だつたのである。

濱松歌國の南水漫遊に大體次のやうな事實が載つてゐる。頃は元祿十四年といふと浪花節のやうだが、例の殿中の刃傷の年の六月六日の夜、南久寶寺町四丁目の河内屋五兵衛の雇人喜兵衛が、同町の三木屋勘兵衛の下人五郎と、西横堀の濱側へ涼みに行つた歸りに、北久太郎町の濱側で、上難波町の木挽、庚申の勘兵衛と同町の板屋三右衛門の下人市兵衛の二人に喧嘩を吹きかけられ、入り亂れて殺陣をやつてゐる所へ、庵の平兵衛が来て、喜兵衛の腹を懐剣で突いたことから、かねて睨まれてゐた五人組の檢舉となり、これらに脇差を貸してゐた道具屋與兵衛こと親仁の三郎も追放せられたのである。

この記録によると、文七と市右衛門は入牢二度入とあるから前科があつたらしい。遊女を情婦に持った文七が書出しどころで、年長の庄九郎が座頭といふ格であらう。

雁金文七は、奈良屋町雁金屋七兵衛後家同家倅、生所大阪年二十八、極印の千右衛門は立賣堀中之町今津屋七兵衛借家極印屋正三郎倅、生所大阪年二十三、庵の平兵衛は博勞町河内屋吉右衛門借家年三十、雷の庄九郎は坂本町加島屋大兵衛借家の者で年三十一、ほての市右衛門は宿なしで年は二十九歳だつた。

これらの連中は、元祿十五年八月二十六日、死罪獄門といふ處刑をせられたのであつたが、文七らは濡れ場もあるし、他の悪友が宿なしや借家住ひの中に、文七だけ雁金屋の倅であり、父親はなく女親の甘さになれて不良に墮ちて行つたところが世人の注意を惹いたものらしい。

これらのことは傳奇作書、實事譚、篋笠雨譚、浪花五俠傳などにも傳へられてゐるが、やはり前記の南水漫遊によつて脚色年代を考へると、處刑後旬日餘で芝居になつてゐる。

(前略) 元祿十五年八月二十六日五人男御仕置に相成同九月九日初日に岡本文彌座のあやつりにて雁金文七といふ外題にて出し宇治嘉太夫には難波五人男と題し竹本座にも雁金文七の淨瑠璃を出し、其後寛保二年戊辰七月二日初日竹田出雲作にて男作五雁金といふ戲文五人男翌後四十一年初日のあやつりより其名今に人口に残れり、天王寺の塔中に雁金文七が奉納せし八島合戦の繪馬ありしが享和年中伽藍回祿の時うせて今はなし。

浪華青樓志に云佐渡町備前屋某抱の女郎清川は五人男達の魁主雁金文七より名を發す實は清瀧といふ卑品の妓也(名を作り嘗て芝居きやうげんに用ゆ)元祿年中の妓なりとぞ。

とある。この岡本文彌座のあやつり雁金文七は黒木勘藏氏によると「雁金文七秋の霜」といふ繪入本、十二行八枚のものだといふ説で、嘗てその全文が雜誌「邦樂」に發表せられたことがある。雁金文七の芝居は、その當時競演せられたばかりでなく、一周忌、三回忌などに改作されては上演されたので種類もいろいろあるが代表的のものは、出雲の「五雁金」であり、近年のものでは、岡本綺堂氏の「雁金文七」と大森痴雪氏の「いづ・雁金」がある。

五人男の墓は生玉寺町正法寺に(日親寺)あつて、雁金屋極印屋と彫てあるとのことで、西澤一鳳は傳奇作書にこの墓を馬琴が見たら喜ぶだらうと、篋笠雨譚の著者に呼びかけてゐる。浪花五人男といへば、何といつても文七が花形であつて、延若は「いつ・雁金」の文七を京都南座の初演以來大阪でも演じてゐるが今度は、雷庄九郎を主としてやると聞いた。

庄九郎は川船水牛の飛乗して暴れ廻つた男で、表面に立たせられ、煽てあけられた文七より、存外、庄九郎や市右衛門が五人男の實權者であつたといふ想像ができぬでもない。この事件はあまりに單純なる市井の一事事ではあるが、俠客物のすくない大阪だけに有名になり、凡庸な不良が一躍、任俠の徒となつたのは、全く作者の筆の餘勢なのである。

浪花暴力團記

倉田啓明

京の南座へ十七年振で六代目が出演するから、それに就て何か——と註文して來るかと思ひきや、中座の關西歌舞伎、延若の雷庄九郎の考證その他をとほ、本誌の編輯者も隅に置けない皮肉な男だ。然し書けといへば何でも書く。亞米利加の夜の大統領R、カボネが世界的流行兒になり、東京では暴力團が續々檢舉されて刑務所が満員、その度胸と規模に大小の差こそあれ、いつの時代、洋の東西を問はず暴力團は泥棒同然濱の眞砂はつきるとも、世に破戸漢の種はつきない。豈ひとり市俄古のガング、巴里のアバツシユのみならんや。だが勿論そのむかし浪花の地を暴れまはつた、雁金五人男、雁金文七、雷庄九郎、極印千右衛門、庵の平兵衛、布袋市右衛門等の面々は、いづれも今言ふ不良少年に毛の生えたやうな代物で、藝ほどの膽に熊毛の生えたカボネなどと貫祿がらがふが、舞臺で見るとなかくの伊達男で、女からわいわい騒がれさうな人間ばかり

だ。市井の無頼を描いた小説は近頃頗る流行して、曩には長谷川伸に名を成さしめ、今また子母澤寛の進出するあり、久々で雁金五人男を張り出して雁金染の洗ひ張りもまた思ひつきと言へよう。

從來「雁金」と五人男の頭に冠せる點から察すると、阿波座邊の雁金染屋のどら息子文七がその一黨の棟梁のやうになつてゐる。また事實さうであつたかも知れない。古いところでは「御誂雁金染」「雁金五人男」など、われ等知る限りの脚本も文七が首株である。また岡本綺堂氏にも「雁金文七」の作あり、延若もかつて大森痴雪氏の書いたものだと思ひするが、「いづ、雁金」といふ作を演じたことがある。今度延若の庄九郎に、魁車、市藏長三郎、扇雀が、あとの四人男を承はる次第だらう。就中、庄九郎は一黨のうちでも、始末に負へない暴れ者だつたといふことが、「攝陽漫稿」「浪華稿」など古書に散見する。彼等の仕事は主として難辭をつけて他人に喧嘩を吹つかけ、金品を強請する。いづれ、新町や堀江の花街を繩張のやうに心得て、女出入もさぞあつたらう。

彼等の徒輩は決して男伊達でもなければ、遊俠でもない。菱川師宣の書本「浮世繪續」の言葉を用すれば「にせ奴」なのだ。往年の男伊達道は元祿以降既に墮落して、「輕口居合刀」

には「當世の六法は物くふても、銭を出さずに逃げてゆく程に用心をせやれ」とあるが、六法とは即ち男伊達の歩きつ振りを模した、歌舞伎の風俗で江戸では乃前と稱へたのだ。然しこの男伊達も無銭飲食の徒となつては、素質の下落も推察するに難くない。これが元祿で既にこの通りだから、それ以後はいふだけ野暮である。想ふに雁金五人男も、この「物をくふても銭を出さずに逃げて行く」手合だつたらう。況んや大阪には江戸のやうな旗本奴はなく、遊俠も島原狂言の模倣から出て、多門庄左衛門や坊主小兵衛の真似ならまだしも、朝日奈宗兵衛位の親分が出た時代は、弱きを扶け強きを挫いて、義とか俠とか謳歌されたらうが、雁金一黨の時代となつては、強きを選び弱きを挫く、途方もない不逞無頼、恰も現代の暴力團と何等選ぶところが無い。彼等は、大抵町人の家に生れ、黄金と好色の餓鬼になつて、庶民に迷惑をかけた運中である。「好色由来揃」といふ本には「木葉六法」といふ言葉が見えてゐる。これは彼等を評し得て妙といふべきだ。

さて、雷庄九郎にこんな話がある。

庄九郎一日、くらがり峠を越えて、奈良に超き三笠山麓で、春日の神鹿の角切りを見物してゐたが、朝比奈の門破りといふ猥猛な大鹿の角を切るのに、役人達は困り切つてゐるのを見て庄九郎例の負けじ魂を出し、いきなりその大鹿に跳りかゝつて文字通りの角逐をおつばじめ、たうとう見事に組伏せ、角を切

らせたのは甚だ勇ましく、なみある人にもその豪勇にやんやと賞めそやしたが、そのまゝ、歸れは大いに男をあげたらうに、若宮内といふ春日の禰宜の家へ押しかけて、強情がましい文句を並べ器量を下げたさうだ。

また、新町橋か何處かの往来で、行人が喧嘩をしてゐるのを見て、縁も由縁もない人間の横腹へ、匕首を刺したまゝ、逃走したので、忽ち御用風を喰つてしよびかれたといふことである。これ等二つの挿話でも、彼等の行状は推測される。

今度の雁金五人男の新解釋とは、どう解釋したのか知らないが、どうしたところで主義も主張もない暴力團に過ぎない。それに色なり綾なりをくつ、けて面白くするのは、脚色の腕にちがひないが、由來江戸の不良少年と大阪のそれとは、全く氣風が異つてゐる。私はさういふ連中と交際してよくわかる氣がするのだ。だから大阪風、破戸漢の色を、はつきり舞臺に出せば一寸面白からう。演者が大阪人だからその邊は心得てゐるだらうけれど――延若も演じた筈だが、並木正三の「宿無圍七時雨傘」の芝居などは大阪の昔の遊人の世界を活寫して興味がある私の知つてゐる大阪の博徒の話だが、その男若い頃、人から賣出すには偉い奴を殺して來なければいけないと教へられて、よし來たとばかり出刃庖丁を呑んで、自分の親分の家へ飛込み突然親分を傷つけて逃げて來たといふナンセンス味たつぷりな

浪華五人男

西尾福三郎

五人男の芝居と云つたら、大抵の人は、例の有名な稻瀬川の勢揃ひで、威勢のいゝ連らねを並べる白浪五人男の事だと早合點をする人が多いだらう。

が、あれは延享年間の出來事で、それに先立つ事四十年も以前に、浪華五人男と云ふのがあつた。だから、五人男は江戸のより浪華の方が本家本元である。時は元祿年間、阿波座堀紺屋の極道息子、鷹金文七を頭分として、極印の千右衛門、庵の平兵衛、雷庄九郎、ほての市右衛門、以上五人の無頼漢が徒

黨を組んで、半俠半賊のやうな渡世をしてゐた。鷹金組とか、七つ組とか稱して、阿波座の芝居や新町の曲論を横行しては勝手な振舞を恣にしてゐたらしい。所が元祿十四年六月六日の夜、西横堀の濱へ夕涼みにきてゐた喜兵衛と云ふお店者が、この鷹金組の仲間の庚申の勘兵衛に突き當つたとか何とか云ふ所から言ひ掛かりをつけれられ、その歸り道雛屋町の辻の所で、一味の庵の平兵衛のために脇腹を突き差されて殺されてしまつた。この事が元で五人男は召取になり、遂に八月二十六日、五人共千日前で獄門の處刑を受ける事になつた。その時、五人の外、前記の庚申の勘兵衛、鳶の勘右衛門、喧嘩屋の五郎左衛門、か

いだての吉右衛門、からくりの六兵衛、因果の平兵衛、三ツ引治兵衛、道具屋與兵衛等と云ふ煩き者がそれ／＼、詮議を受けてゐる。この内道具屋與兵衛は一名親仁の三郎と云つて、これはあばれ者ではないが、例の五人に兇器を借した咎で罰せられてゐる。何でも船仲間の顔きであるらしい所から考へてみると、夏祭浪花鑑に出てくる面白い爺さん釣船の三婦のモデルではないかと思はれる。

この出來事は當時かなり評判になつたと見へて、馬琴の蓑笠雨談に委しい見聞が出てゐるし、その外、攝陽奇觀、燕石十種等にもそれ／＼記載されてゐる。蜀山人の戯歌にもこんなのである。

浪花江のあしき友にも交はれば
いつしかそまるいつ、かりがね

この事件を淨瑠璃に取入れたのが、岡本文彌宇治加大夫の雁金文七であり、後に竹田出雲が改作して男作五雁金と名題をつけた。更に享保十五年江戸中村座の秋狂言に名月五人男と題して二代目團十郎、宗十郎等で演じてゐる。殊にその時の五人男のせりふが團、宗二人の合作で大變な評判になつたと云ふ話だ。降つて寛政年間、村風幸次が男達五雁金と云ふ外題の狂言を書いてゐる。

當地では大正七年五月、京都南座でいつ、雁金と題して延若の文七で演つた事がある。

五つかりがねは河内屋の換紋であり、五つをいづ、に解釋しても同じく延若の紋所で、この狂言は以前から河内屋の賣り物になつてゐる。

が、今度延若がやるのは、五人男の内の雷庄九郎の新釋である由、私はそれに就いて何もきいてゐないから、果していかなる内容か知る事ができないから、總ては公演の日を期待して以下少し雷庄九郎の考證のいたものを書いてみよう。

出雲の作によると、庄九郎が雷と云ふ紳名を持つたのは、雷太皷を自分の紋所にしてゐたからであるらしい。それから尺八を腰に差す事は當時の男達の見得であつたらしく、これは必ずしも明和の助六一人の專賣ではない。更に、櫻臺鐵飯打つたる草履下駄を五人男が履いてゐたと出雲の淨瑠璃に出てゐるが、享保初年に出た大津繪の寫しをみると、五人男の肖像が出てゐる。それによると皆三枚齒の下駄に白博多の帶、ドテラのやうなツンツルテンの黒地衣裳に、も、色？の足袋を穿いてゐる。さうかと思ふと、又一方の繪の寫しには、五人共揃ひの荒い菱格子の衣裳を着た半身像が出てゐる。ついでに、庄九郎の申し口——今で云ふ印審調書——の寫しを左に掲げてみよう。私儀數年宿無しにて川舟飛乗加子致罷在候處若氣にて人集之場所においてあばれ候事數十度之儀に御座候去年冬迄は喧嘩屋五郎左衛門三ツ引治郎兵衛等申合あばれ候得共去年十一月より七組と申あばれ者雁金文七極印千右衛門齋勘右衛門組合に入候様に進め候に付同心仕則三人之者共私を取立宿持に

致吳候依之當二月以來喧嘩屋五郎左衛門と不通仕候私帶候大脇差を讀岐町親仁三郎事道具屋與兵衛と申者より借用致候この與兵衛はあばれ者を引廻し出入等有之時分可取扱仕者にて御座候

私儀人に疵付候事三年前南堀江にてあばれ者ほて市右衛門同道の町人四人召連罷通候所三ツ引治郎兵衛喧嘩屋五郎左衛門私申合あばれ掛り相手の町人一人私棒を以打擲疵付申候五幸町にて往來の者へ脇差にて切疵一ヶ所雜喉場町浦屋島之町人利右衛門へ及打擲棒疵一ヶ所白髮町にて往來の者を脇差にて肩先一ヶ所堀江住吉橋にて往來の者を脇差にて一ヶ所以上五ヶ度手を負申候右あばれ候時分頭巾鼻紙入等押取申候且又去年極月新三十石船にてふとん一つ盜取申候此外町中にて追取物致候儀無御座候三ツ引治郎兵衛は度々追取働候儀及申候云々

次に庄九郎の斷罪書の寫しを出す

坂本町加島屋太兵衛借屋

雷鳴庄九郎 三十一歳

死罪獄門

一此者町中にて數度あばれ相手に手を負せ候段五度有之相手の頭巾二ツ押取並三十石船にて布圍二ツ盜取候差步候大脇差は極印千右衛門道具屋與兵衛より借用仕事前に所持候事云々

尙、攝陽奇觀に據ると、五人男の石碑が千日前の雷神木の東に俗名許り彫りつけて残つてゐたとの事であるが、果して今は何うなつてゐる事か。文七と千右衛門の墓は高津の正法寺にあるとか、又、丹州千ヶ畑法常寺末寺法求寺に五人男の石碑があるとも書いてゐる。

東京へ進出した
家庭劇に寄す

(順着到)

高澤初風

東京で始めて見た松竹家庭劇——寄合

世帯の缺點は何處かどつしりした統一された一座の味に乏しいが、昔からの比較で故十郎の軽いが實のない一座、實はあるが油濃い五郎の一派、その中間を行く樂天會——狙ひ處は茲で、幸に十郎の味の十吾、亡父とはまるで違ふ天外、悲惨に見えるが押への利く小織、それに十次郎などで十郎一座式のいゝ脚本を選んで行つたら、馴染の見物もつくと思ふ。

伊藤晴雨

大阪の観客と東京の観客との根本思想の相違を家庭劇は研究と認識不足の感が

あると存じます、ハツキリ云へば小織と十吾、天外君兩氏の藝風がピツタリして居ない事。

- 1 俳優全部達者過ぎて統一の無い事
- 2 皮相なる見解から「自然の藝」は生れまじく結局枯淡な藝は冷酷なる世相と相背馳する爲に興行上には失敗と存じ候。
- 3 家庭劇といふ名稱が何となく弱い響きを與へた爲に木戸際迄見物を引つ張る力が稀薄だつたと存じます。

大隈俊雄

明治座の家庭劇を未だ観る機を私は得てゐません。従つてこんどの明治座の家庭劇を云々できないのですが、最近喜劇

といふものが演目の内で相當重要視されつゝ、あることは非常にいゝことだと思つてよろこんでゐます。おそまきながら漸く喜劇といふものが大事にされだしてきました。これから劇團も興行當事者も社會相を考へて、もつと優れた、ユニークな喜劇の上演に志して、現在の餘りな卑俗的さからおい／＼に退却し、どんな家庭の人でも氣持よくみられ、そして朗らかさの中になにかを與へられるやうな喜劇を上演するやうになつてほしいと思ひます。

伊原青々園

出演の人たち個人的にはそれ／＼に長所がある事を認めました、しかし其等を一座として組合はした上に於て、互ひにピツタリと穂が折合はないといふ感じがあります、もつと調子の揃つた人だけ小人数で一座でつくつた方がよろしくはありますまいか、また脚本ももつと精選する必要がありますが、また脚本ももつと精選する必要がありますが、

畑 耕 一

小織桂一郎といふ子供の時分から知つてゐる俳優を久しぶりで舞臺で見た時、私はたゞ急に泣きたい氣持になりました——私は別にセンチメンタリストではないつもりですが——

足 立 忠

東京になじみのないせいか、宣傳の割合に足らなかつたためか、せつかくの家庭劇の初陣、興行的には恵まれなかつたのは残念でした。氣落しをせず漸次東京へ賣りこむ工夫をしたらいいと思ひます小生のヒイキ役者、十吾、ちと臭味が出て來たかと思ひますが、どうでせう。東京で一ト修業させては——といつても別に彼が合流する喜劇團體はありませんが……。十吾の故十郎にまでなる日を持つてゐます。

津 村 京 村

生憎病臥中で此度は見る機會がありませんでしたが、然し大阪へ行つた時に何度か見物した事があります。特殊な、持味の有る面白い劇壇だと思ひます。今度の東京でも、概して評判がよかつた様でした。

石 井 迷 花

喜劇といはず家庭劇と銘打つてゐるだけに樸りや誇張が少なく、寫眞的にさりと運ぶ演出が言ふ通り朗らかに笑へる明るいお芝居で、家族連れで安易に肩が張らずに鑑賞出来るのが何より嬉しい。生活苦に追はれる現代人の慰安娛樂には極めて適したものであらう。二回の興行中狂言では「お祖母さん」が最も面白く俳優では十吾のお祖母さんが傑作であつた。

岡 田 孤 煙

初出演の「松竹家庭劇」を見て感じた事はさすが大阪生れだけに曾我廻家劇と

兄弟のやうに見える事です、家庭劇としてならばモット新らしく他の途を行くべきだと思ひます。

梅 島 昇

曾我廻家を古い意味の新派劇に近い演出だと云つて居る私は、家庭劇を新しい意味の新派に笑と囃子を混ぜた芝居だと思ひました。小織先生の大きな舞臺十吾氏の輕妙な味、天外君の熱演、やがては馴染が出来て東京で喜ばれる劇團だと思ひます。私共のかねぐねらつて居て、まだ實現されない事をやつて居るので羨やましいと思ひました。

鬼 太 郎

明治座二の替りを通じて觀たる所。小織は喜劇ならぬ眞面目な芝居の場合に新派昔日の技倆を現せり「道化師の戀」の團長は第一の出來。十吾は故十郎の行き方を守る所に飄逸味十分「親父の極道」の母親は獨特の藝。此の他男優にては十

次郎、天照等、女優にあつては薫、音羽の兩人よろし。天外に至つては何等見る技藝なく唯若役向きの年頃の人といふだけの事、七光りの有難さよ。

○ 花柳章太郎

小織桂一郎氏 新派の先輩として敬意を表して居ります。

曾我廼家十吾氏 評判のお祖母さんが拜見出来なくて残念です。

澁谷天外氏 一度飲んだことがあります、頭の下さがわかりました。

○ 水谷幻花

家庭劇は第一回を觀たきりですが、關西で好評を博したものと云ふことは默首れます。小織ばぐつと大きく見えまして。十吾の持味は一寸類と真似がありません。天外が親まさりになるのも、餘り遠くはないだらうと思ひます。

○ 大久保將吉

一、松竹家庭劇……混成劇團として、いろ／＼の意味から多少の無理もありませうが、先づ結構なものと思ひます。出し物によつて、水に油の混つたやうな感じもありますが、是れは其のうら追々と消えて行くでせう。

一、小織桂一郎君、俳優としての藝としても立派なものです、けれども藝が古いだけに物によると現代とかけ離れて行くやうな感じもするので、小織君として今後全く家庭劇俳優なとして生きて行く覺悟があれば新生面が拓かれるでせう。

一、曾我廼家十五君、甘いものです、達者なものです、然しまだ五郎君の域に達してないやうです、兎も角も重鎮でせう。

一、澁谷天外君、勉強が専一です、モット苦勞をせねば可けません、藝として亡父天外氏の足許にも及ばないでせう。

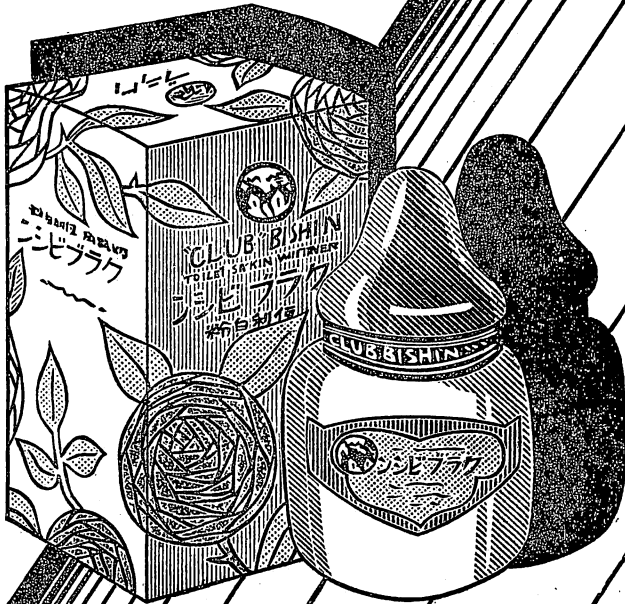
眼鏡印
肝油

The advertisement features a central illustration of a glass bottle of liver oil with a label that includes a pair of glasses and the text '眼鏡印' (Glasses Brand). To the right of the bottle, the characters '眼鏡印' are written in a bold, stylized font, with '肝油' (Liver Oil) written in an even larger, more prominent font below them. The background consists of radiating lines emanating from behind the bottle, creating a sunburst effect.

この麗しさは美しさ

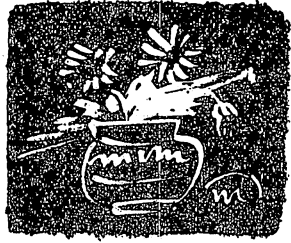
ソビブラク

白色・肌色 正價 三十銭



新發賣の
布袋入の

ソビブラク 洗イテカ粉



「反逆する光秀」

—舞臺装置その他—

大森 正男

在來の歌舞伎芝居の定式の飾り方といふものがあります、長年の間に工夫の上で工夫が重なつて、現在の天地低く、間口廣き劇場の構造と、演出とにびつたり合つた舞臺装置の完成した型が出来てゐる譯です。

此定式の型には私共の學ぶべき點が、甚だ多いのであります。その善いとこそを残して、悪い——即ち最近の演出に向きなきところを捨てる——それが私の研究の一ツなのです。

○ 今度の「反逆する光秀」の舞臺装置もその習作の一部なのです。建物を構成してゐる要素の中から、ランマ、壁等を出來るだけ省略しました。それから壁の高さを或程度にとどめて、その後——即ち背景に、その建物のある周囲の情景を描く事にしました。

○ 此方法は最近私が種々試みてゐるところのものです。そして常に自分をいましめてゐる點は、あまりに説明的になる事です。

○ 壁の組立法は、角度に注意しました。それは全然寫實を無視して、立體的な多種の面を作りました。その結果、複雑が混雜になることを恐れて、色調を出来るだけ單純化しました。

○ 舞臺全體の構圖としては、在來の舞臺装置の繪畫美をよほど考慮に入れました。その點甚だ妥協的です。

○ 此の私の甚だアイマイに見えるであらう態度が批難される事を恐れます。思ひ切つた革新の出來ない事は、私の性格的缺點許りではないのです。現在の劇場、現在の脚本、現在の演出、現在の役者、現在の興行方針等々ではお互にかくかく、アイマイに誠に妥協的な方法で進んで行くより方法がないのです。

商業劇場である以上、観客の大部分をしめるところの劇に對する感覺の程度といふものを、私共はよほど考慮に入れなければならぬのです。

私は自身の趣味としては、所謂藝術的なもののみを目的とする方針よりも、(大衆藝術的に)大勢の観客相を尺度に對しての研究を望んで居ります。併しその研究にしても、今少し設備のい、劇場を望んで止まないのです。

光秀の舞臺装置として、もつと研究してやつて見たかつた事は、劇の主人公である光秀の心理的變化を強調するために各場に色彩的變化をもつとはつきり作つて行きたかつたのです。

未だに私などが、舞臺装置の上に、所謂繪畫美的範圍を出切らないのである點を恥しく思います。

私は長年レヴエウの舞臺装置をやつてゐるために、少し色彩を使ひすぎる様です。巴里で勉強してゐましたときに見たかのピトエフのものなどは、目にたつ色彩はほとんど使はず、劇のクライマックスの法庭で、中心人物の女がたゞ一人赤い衣裳を着せてあるなどは、大いに學ぶべきだと思つた事があります。



「反逆する光秀」

—その演出に就て—

野淵昶

鳥江鏡也君の「反逆する光秀」は三月京都南座で演出したものだ。作者の同君にも、演出者の僕にも第一劇場の「楠木

「反逆する光秀」の舞臺装置として私は完成したとは思つて居ません。従つて眞面目な批判を伺ひたいと思つて居ます。

不思議な習慣で、舞臺装置に就ては常に黙殺されがちです。私は今後も機會ある毎に自分の舞臺装置に就いての記録を公開して、皆さんの御示教を待つ心算で居ります。

正成」についての時代物の第二回目的制作だ。「楠木正成」は大朝の花光君が評してく

れたとほり、石橋をたたいて渡るやうに用心して、新時代劇演出の常識を離れまいとしてかかつたものだ。どうもこれは始めて時代劇に手を染めた僕が、少々堅くなつたのと——もつと正直に白狀すると僕にだつて時代物がこなせるぞといったやうな妙なでらひ氣が働いたことから來たのだと思つてゐる、今から思ふと、僕はもつと大膽に、自分が今まで近代劇をあつかつて來たと同じ手法で「楠木正成」を演出すればよかつたのである。そして直木三十五氏のものなどはさうした手法であつたつて行つた方が、ずつと効果があつたらうにと、遺憾でならない。

ところが、第二作の「反逆する光秀」では、時代劇の近代化にはまことに好適の材料をあたられた。鳥江君のこの作には近代的な思想と感情とが豊富に盛りれてゐた。同君はこの戯曲を南蠻更紗のやうな情調だといつたが、僕はそのエキゾティックな情調や懷古趣味を越えて、

壓迫され暴虐される者の反逆する意志力の強味を感じた。「反逆する光秀」はただちに現代に置き變へて「反逆するプロレタリア」としても充分、適應されるのである。忍従に忍従を重ねる光秀の氣持に観客が同感共鳴するもの、あらゆる壓迫を爆破して「本能寺へ！本能寺へ」を絶叫する光秀と共に叫號したくなるもの、観客自身の不平不満、壓迫に對する憤怒のほとばしりだ。

「反逆する光秀」の演出では、だから僕は新時代劇の常道などは蹴とばして、プロレタリア劇に近い手法で、ひた押しに押しとほしてみた。勿論、活歴以前の歌舞伎の形式から遠慮なく入用なものは頂戴したが、歌舞伎の様式にはソフエートの最も進歩的な演出家達ですら多く學んでゐるのだ。ただその形式を生のまま借用せずに完全に自分のものに、こなし使つたことは見る人が見てくれ、ば分つて戴けよう。

實際、馬廄の場のクライマックスなどどうもあれ以上の演技形式があるとは思はれない。それを頂戴しないなどは、寧ろえこじといふべきだらう。

南座の「反逆する光秀」の評は非常によかつた。そして僕の演出意圖が少數の歌舞伎劇心酔者を除いて、充分共鳴して受入れられたと思つてゐる。少くともかうした破目をはづした演出が現代の観客には不思議でも何でもなくなつてゐるのである。

大森正男君の獨逸表現派後の舞臺装置も鳥江君の作の意圖、僕の演出意圖とびつたりあつたもので、充分の効果をあけてゐる。關西の時代劇にかつて出現しなかつた装置だ。

とにかく「反逆する光秀」は作者、装置家、俳優、演出家の息がびつたりあつた制作として、近頃僕の快心のものだ。新聲劇の俳優諸君の演技また劃期的のものあであることは、僕が保證する。

初秋 九月東京劇界の展望

小 出 英 男

新秋九月とは云へ残暑はまだ却々厳して。それだけ各座の陣容は相當苦心の跡が見受けられる。

歌右衛門以下、羽左衛門、仁左衛門梅幸、幸四郎、左團次等大頭連が顔を見せないが、それだけに中堅新進若手總動員で固めてゐる。各座夫々新人の潑刺たる舞臺を競はうと云ふ策戦である。

▲歌舞伎座 去る五月興行の菊吉合同以來四ヶ月振りで出勤の吉右衛門を陣頭に、時藏、九藏等の一門の外に、大阪福助、政治郎、壽三郎が加はり、更に友右衛門、我當、家橘、又珍らしくも松蔦加入と云ふ一座。

狂言は一番目「平家女護島」鬼界ヶ島(一場)、中幕は大森痴雪氏作西鶴五人女の内「樽屋おせん」一幕、二番目は「増補双級巴」二幕、大喜劇は岡本綺堂氏の新作「狐の戯れ」一幕と云ふ陣立。一番目では吉右衛門が十年振りで得意の俊寛を演じ、その他の配役は妹尾十郎が友右衛門、千鳥は松蔦丹左衛門は福助等、右右衛門の俊寛は敢えて贅言を要しない。久々のその熱演振りは期待するに足る。「樽屋おせん」は福助が十八番として自他に許す當り藝。その滲み出す優雅な大阪情緒は東京俳優の絶對に追従を許さぬ處であらう。因みに壽三郎の伊助は當人

初役との事である。おさがは松蔦、是又興味ある配役である。二番目の吉右衛門の石川五右衛門は大正十三年明治座にて上演以來十七年振りである。今度は繼子責より藤の森鳥居前の大立廻りまで、崩れた型を糺し、古風を主として演出する事となつてゐる。おたきは時藏、兵部は友右衛門、東馬が我當尙大喜劇は岡本綺堂氏の新作喜劇「狐の戯れ」で小村雪岱氏の舞臺裝置で、友右衛門、松蔦、時藏、壽三郎、九藏我當、家橘が總出で清元連中、竹本連中出語り。狐によつて階級意識をほかにカリケチユアライズしたもの。芝居の狐に關する役々が、例へば八重垣姫に勝頼と云つたものが悉く現はれる筋である。とまれ九月劇壇中唯一の大歌舞伎である。

▲東京劇場 河一つ隔て、歌舞伎座に對抗する策戦として、二大新作を揃へた。一は朝日新聞に連載され、現大衆

文藝界の壓巻として鳴る長谷川伸氏の「戸並長八郎」の劇化。五幕八場がある。第二は木村錦花氏脚色の「居残り左平次」二幕六場。俳優は猿之助、八百藏、しうか、段四郎、勝太郎、芝鶴、訥子、齋美藏、高助、松廷、村右衛門、權十郎、田之助、河合武雄と云ふ顔ぶれ。「戸並長八郎」の脚色は眞山青果、川尻清潭の兩氏によつたもの。潤達、豪膽、純情多血にして正義心に富み邪惡と見てとれば猪突猛進して一氣に劍を振ふ一代の痛快兒戸並長八郎は、懸賞募集により至好劇家の推薦にて猿之助が扮する。その特異性はこの猿之助によつてこそ十分に描破出来るものであらう。筋はその得意の劍を振つて斃した悪漢の中に長八郎の想ふ姫君の愛人がゐたのである。切ない戀を胸に疊んで江戸を指して旅立つ快男兒の戀物語である。宇芽本のお瀧は河合、中の瀬喜七が齋美藏、森半三郎に樺部別所之

助が訥子等の配役。二番目の「居残り左平次」は、吉井勇氏の傑作で有名は「小しんと焉馬」の小しんのモデル、故人の小せんが十八番として高座に掛けてゐた落語を木村錦花氏が劇化したもの、江戸の不夜城吉原の大籠桔梗屋に居残りとなつた佐平次が苦心慘膽、逆に金を儲けて歸ると云ふ筋、現時には想像にも及ばない吉原全盛時代の習慣、禮式等を悉く織込んである。佐平次は猿之助。この外一座の若手中堅が總出演する。共に興味本位の大衆劇である。歌舞伎の大歌舞伎に對する一戰果して勝負は何れにつくか?。

▲帝國劇場 大阪文樂人形淨瑠璃一座が七月の明治座出演の好成績に、再度の上京出演を見る。今度は古靱、鍛以下新進の太夫、三味線、人形師を網羅してゐるが、その美聲攝津大掾を想はせる騎太夫が十年振りて参加上京するのが期待されてゐる。今回は従前の三

日間替りを期間の短い爲め見落し勝ちと云ふ非難に基き一週間替で四回公演する。第一回狂言は「伽羅先代萩」の竹の間に御殿、心中天網鳥の紙屋内の段、攝州合邦辻、「三十三間堂棟由來」平太郎内の段等である。

▲明治座 花柳、小堀、英、柳、大矢伊志井等新派精銳の總動員に井上正夫更に水谷八重子が参加してゐる。

狂言は第一「宇野千代作」まはり燈籠」一幕、第二山本有三作「嬰兒殺し」一幕、第三佐々木邦原作巖谷參一脚色「大番頭小番頭」五場、第四徳富蘆花原作川村花菱脚色「不如歸の浪子」五幕九場で、第一の「まはり燈籠」は彼の「悪粟は何故赤い」の宇野千代女史の作として珍らしい下町情調を描いたもの。江戸氣質一途に懐古趣味に生きる勝負氣な藝妓と、かすかに時代の流れに目覺めた若い新派俳優とを活躍させてゐる。藝妓の染吉は花柳が獨自の

技を見せる。俳優は柳の第二の「嬰兒殺し」は特に作者に乞ふて時を初夏に改めたり、又種々改訂を行つた上、新しい演出法により新味を出さうと園池公功氏が苦心してゐる。井上の小山巡查、八重子の女士方、共に初演である兩優の熱演こそ見るべきものがあらう「大番頭小番頭」は現代エーモア界の巨匠佐々木邦氏の原作。大學出の新しい學士が如何にして就職戦線を突破し得たか。此處に氏一流のモダン就職珍談を展開する。配役は小堀の大番頭、花柳の小番頭、主人の妻は八重子等。絶好のコンビネーション、第四の「浪子」は今度新たに川村花菱氏が浪子の處女時代に出發して、繼母に對する懐惱、老將軍の父性愛を強調してゐる。花柳の武男、八重子の浪子、井上の老將軍、小堀の下男重助等の配役、井上も花柳も本讀みの時涙がとまらなかつたと云ふ父性愛劇の傑作である。斯く

名作新作を揃へて新派獨特の藝風を完璧にまで發揮しやうと云ふ陣容。▲新橋演舞場、曾我廼家五郎が出演する。五種の狂言は、五郎が今年の酷暑を冒して執筆した悉く新作揃ひ、興味を中心は、物質萬能利己主義一點張りの現代に、理學博士とその舊友の失業者及びその妻の兄と三人の間に醸し出された美しい友情を描いた「友情」とはり子の眞と仇名をそのまゝ、に首を振りく世を過ぐす老婆、この老婆の不思議な家出事件を扱つた「はりこの眞」等であらう。この他に「女難」拾ふた戀「それから曾我廼家の一ファンから得た投稿を脚色した「かくれ遊び」がある。

(十五頁よりのつゞき)

が何ぢや、どうせ上様に潰される明智の家なら、今のうちに力のあるうち立

上がらう」
「どうするのだ」
「立上られ、劍を持って、刀を握れ」
「そして」
「敵にぶつかるのだ」
「エツ敵ツ？敵とは？」
「安土の城主——織田信長だツ」一同はきつとなつた。
「待て、早まるでない——早まるでない。皆の心は嬉しいが上様に及向ふべきではない、光秀は少しも上様を恨んでゐるぬぞ。君、君たらずとも臣は以て臣たらずんばあるべからず……俺は寧ろ君恩に感謝してゐる。この光秀一介の浪人から身を興して漸く一國一城の主となれた。皆上様のお蔭ぢや。早まつた事をして後悔するでない」
皆んなを戒めながら、光秀は自分を心に云つて聞かせてゐるのだつた。

◆ 劇壇 往來 ◆

中座 九月 興行

二 日 初 日
毎日午後四時開演

【狂言】 一番目大阪朝日新聞連載長谷川伸作、野淵昶舞臺監督「戸並長八郎」四幕大塚克三装置・中幕上野口雨情作、食滿南北舞臺監督雨二題の内「春雨」清元連中・中「羽根の禿」長唄連中・下中内蝶二作「起上り小法師」清元連中長唄連中。二番目大森痴雪舞臺監督「青天井」二幕松田程次装置吉川観方衣裳考案

【劇役】 字芽本女將お瀧(喜多村) 檜山大八郎、雁金屋文七(扇雀) 田島東兵衛、柳田半兵衛、砂村仁助、行司式守彌の助(吉三郎) 森半三郎、岩上小彌太、手先梅吉(徳三郎) 若き女、禿たより、娘お花(菊枝)◇虚無僧 喜月實は中の瀬喜七、女郎おしげ、布袋市右衛門(魁車)若き男、起上り小法師賢、ボテ

振善吉(長三郎) 印東宗馬、刻印子右衛門(霞仙)お袖、娘角力色目山(成太郎)薬者染吉(延太郎) 萩針久三郎、手代宗助(扇)澤屋若イ者、札番佐平(芦鷹)岡つ引久藏、甘酒屋の爺(美鷹)子分松公、井筒屋又三郎、八百屋若イ者(駒之助) 捕手頭、番頭藤八(鷹正)女郎お三手代孫七(魁童)女郎おしな、餉賣(鷹之助)與力塚上藤兵衛、世話方の男、夜番(延郎)岡つ引文吉、占部専藏(八百藏) 供の丑松、遊人甚藏、老僧、家守勘兵衛(九開次)船頭彌兵衛、櫛部別所の助、案の平兵衛(橋三郎)遣手おてつ、母親のおさき(蓮女)戸並長八郎、雷庄九郎(延若)

満三週年記念興行

家庭 劇 お目見得

浪花 座

九月一日 初日
晝夜二回開演

【狂言】 第一「岡目八目」一場。第二「人の猿まね」二場。第三「バットの空箱」一場。第四「或る女給の話」二場。第五「山へ登る船」二場

【配役】 星野庄吉、小説家宇田清三、船頭常三(天外)前川の知人船越、釣をする男篠田、船頭與助(三郎)主人米造、腰辨の男、集金人片山、釣をする男(一郎)帳場係爲造、クローニンク屋、豆腐屋由松(鐵彌)樟腦賣由松、新内流し(富士)松永幸太郎、玉出し虎造(十次郎)隠居、仲仕、釣をする男山岸(左久馬)伯母お重、近所の男助一、汽船に乗る老翁(時彌)國旗屋の親爺、職人龜助、客中川(富士島)金貨田村、番頭山村(致雄)幸太郎の妻お定、紙屑屋梅吉(天照)幸太郎の息文雄、田中平造、乞食森田福平(十吾)女房おます、齒科醫の妻民子、きぬの母お米(守佳)和田の妻おきく、女給鈴子料理屋娘お定(春日)女教師小村澄江、仲居お兼(村田)女中おえ、田舎娘お雪都(長屋)女房おぬい(萩一)女教師大場かね子(濱地)女房おしげ、宇田の妻鶴子、女給田中みや子(如月)岩坂の妻浪子、倉橋の妻ふさ、女給頭小林喜代子、常三の女房お石(春野)紳士岩坂、小説家谷川一郎、玉出し金太郎(賀川)店員徳松、下男當七、船頭太七(三樂)別荘主人前川、小説家倉橋寒村(小

織)

壇 劇 の 月 九

新 聲 劇

角 座

一日 初日
晝夜二回開演

【狂言】 第一鳥江鏡也作(新興舞臺所載)

野淵昶演出「反逆する光秀」三幕六場裝置
大森正男、照明村田芳生。第二徳用純宏作

野淵昶演出「争闘」一幕裝置松田種次、照
明村田芳生。第三行友季風作徳田純宏演出

「旅業一本刀」二幕四場裝置藤井亜木良

【配役】 連歌師里村三巴、鹿沼の源太(辻
野)明智左馬之助光春、松崎の子分新助(小

波)小姓千代壽、石川柿夫、若荷屋子分三
丁龜(原)薄尾庄兵衛、貸元若荷屋幸右衛門

(中澤)齋藏内藏之助、浪人平松重四郎(藤
本)案内人佐兵衛、古宿の仁兵衛(伊川)堀

休太郎、追分の熊十郎(芝田)三宅藤兵衛、
安倍川餅屋の亭主(原田)森蘭丸、若荷屋子

分堂前の吾助(吉田)肴町の久造(波多)織田
信長、別宮富士雄(山口)廓藝者小稻(和歌

浦)餅屋の娘(磯部)侍女かなめ(福岡)紐川

忠興夫人秀子、照美(小松)安倍川餅屋女房
(金剛)雇女お甚(澤井)明智光秀夫人照子
(富士野)明智光秀松崎の大平太(中田)

文 樂 座 人 形 淨 瑠 璃 興 行

一日 初日
毎夕四時開演

【狂言】 前「ひらがな盛衰記」天津宿屋よ

り逆櫓の段まで。中「蝶花形名歌嶋臺」
小坂部館の段。次「三十三所壺坂寺」澤市

内の段。切「切嶋山古跡松」中將姫雪實
の段

【太夫劇】 天津宿屋の段、お筆(町)船頭權
四郎(貴鳳)女房およし(富)山吹御前(長子

陸路)番場忠太(龜久)駒若丸(さの、文字
榮)倅榎松(佐久、相壽)(芳之助、友三、

可太郎)笹引の段(相生、友之助、清二郎)
逆櫓の段中(鏡、友平、綱右衛門)切(大隅

道八)小坂部館の段中(文字、廣助)切(津、
綱造)澤市内の段中(綾、浪花、廣太郎、友

若、友作)切(土佐吉兵衛、友右衛門、寛
市、吉左)中將姫雪實の段、豊成公(土佐)

岩根御前(南部)中將姫(小春)大貳廣次
(長尾)桐の谷(源路)浮舟(文)好宅内(千
駒、播路)奴角内(隅榮津磨)(吉彌團六)
胡弓(勝芳)

【人形劇】 お筆、妻眞弓、女房お里(紋十
郎)船頭權四郎、木村又藏、大貳廣次(玉
幸)山吹御前、桐の谷(紋太郎)鎌田隼人、
水海左衛門(光之助)船頭又六、奴角内(覺
三郎)一子笹市、觀世音(榮三郎)倅榎松(榮
之助)妻葉末、岩根御前(政龜)駒若丸(文
枝)一子松太郎(紋司)番場忠太、船頭富藏、
浮舟(市松)奴宅内(兵次)船頭九郎作、加藤
正清(傳之助)女房およし、中將姫、扇太郎)
島山重忠、豊成公(玉次郎)大友三郎(玉七)
船頭松右衛門、小坂部兵衛、澤市(榮三)

編輯後記

燈下讀書に親むの候とやらが、どうやら本格的になつて、本誌も愈々活動の機に入りました。

× 中座の新作と新舞踊の、延若魁車長三郎扇雀に喜多村、菊枝の混成大一座に京都は十六年振に菊五郎來演など、九月の關西劇壇は、近ごろ珍しい緊張振りを呈し、本號は、斷然面目を革めて、諸子に見見得る事を特筆させて頂きます。

× 同時に内容は、見て戴けば判る事だが、その充實振りと、豊富とで、先づ發行日の二日や三日遅れた事は充分にうめ合せをつけて頂けるものと信じます。

× 八月家庭劇が東京進出に對する東京在住の諸家の批判、菊五郎座談會の記事及び九月興行に自作上演の各作者（長谷川伸、行友李風、鳥江鏡也諸氏）が

それらの作品についての諸説は、觀劇の好伴記事として、必讀をおすすめいたします。

× 中座の二番目狂言「青天井は」元來チャップリンの「街の灯」を翻譯脚色したのですが、歌舞化にするために世界はすっかり「雁金五人男」になつて居ます。しかも主人公のルンペンも雷庄九郎として、延若が活躍して居るので特に「雁金五人男」の考證を諸先生にお願ひいたしました。これと、京都南座に於ける菊五郎の「權太」の考證は、久しぶりに本誌の本誌らしい記事として愛讀者諸氏に喜んで頂けると存じますが……………。

× 尾上菊枝大阪初舞臺（中座出演中）で歌舞伎畑に女優の進出は新時代の一傾向としても見逃せない事なので女形と女優の將來といふ題下で、菊枝を中心とした所感を劇文壇の方々に戴きましたが、女形がとかく問題になる現下、是非一讀をおすすめいたします。

（住田生）

昭和六年九月一日發行

月刊『道頓堀』第六十輯

◆ 誌代は前金でお拂ひを願ひます。

◆ 郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。

◆ 御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社

大阪市北區中之島二丁目

廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越し下さい

特價金參拾錢（郵發五加）

昭和六年八月卅一日印刷

昭和六年九月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地

編輯者 鳥江鏡也

印刷者 北島竹次郎

大阪市東區區廳前二丁目

印刷所 桃谷印刷株式會社

大阪市南區久左衛門町八番地

松竹興行株式會社大阪支店

發行所 道頓堀編輯部

電話 二二四〇番 六六六五番



品質精選
百貨の充實
より御便利
よりお安く
奉仕第一

日本橋

松坂屋

大阪

昭和三年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和六年八月三十日
昭和六年九月一日發行

二酸化チタニウム配合

クブラ白粉

高雅な白色
モダンな肌色
清楚な水色
明るい桃色



クブラ石炭

泡立ち
のよい

「道頓堀」第六十巻 第六年九月號

一部金參拾錢